

地方道路交付金業務(主)下仁田臼田線
埋蔵文化財発掘調査報告書

— 臼田町内 —

みぶん
三分遺跡

2005. 3

長野県臼田建設事務所
長野県埋蔵文化財センター



三分遺跡全景（③区西から）



三分第1号古墳周溝

序

主要地方道下仁田白田線は、南佐久郡佐久町海瀬を出発点とし、白田町龍岡城下の集落地域を抜け、関東山地の田口峠を越えて、群馬県南牧村へ通ずる地域の幹線道路です。交通量の増加に伴う田口集落内の事故や渋滞を防止するため、長野県白田建設事務所は同線のバイパス道路建設を計画しました。本書は、この事業により記録保存されることになった三分遺跡の発掘調査報告書です。

下仁田白田線が通る白田町田口地区には、全国で二例目の星形城郭をもつ史跡龍岡城や室町時代創建といわれる重要文化財新海三社神社三重塔、県宝御魂代石、同じく上宮寺梵鐘など、中・近世の重要な歴史遺産を数多く保有している土地柄です。また、南佐久郡有数の古墳群が存在する地域でもあります。これらの文化財は、下仁田白田線に並行する雨川の北岸に集中していました。

今回の発掘調査では、雨川南岸では今まで確認されていなかった古墳が発見されました。新たに発見された古墳は、遺体を埋葬する部分はずでに削られておりましたが、墳丘から転落した壺や甕を伴う周溝を確認することができました。今回の調査で得られた新たな資料が、地域史解明に向けて多方面で十分に活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、保護協議および発掘調査から本書刊行に至るまで、深いご理解とご協力をいただいた長野県白田建設事務所、白田町、白田町教育委員会など関係機関及び関係者の皆さまに、厚く御礼を申し上げます。

平成17年3月4日

財)長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター

所長 小 沢 将 夫



例 言

- 1 本書は、長野県白田建設事務所（以下「建設事務所」という）による地方道路交付金業務（主）下仁田白田線田口バイパス建設に先立ち、緊急発掘調査された南佐久郡白田町に所在する三分遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘作業及び整理作業、報告書の印刷刊行業務は、建設事務所からの委託を受け、平成15年度及び16年度に実施した。調査主体者は、(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という）である。
- 3 本遺跡の調査概要は、すでに「長野県埋蔵文化財センター年報20」で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。
- 4 本書で掲載した地図は、国土交通省国土地理院発行の地形図（1：25,000及び1：50,000）、白田町発行の白田町基本図（1：10,000 1：50,000）をもとに作成した。なお、今回は旧日本測地系に基づいた。
- 5 測量基準点設置及び単点測量等の測量業務は（株）こうそくに、石器の実測は（株）アルカにそれぞれ委託した。
- 6 石器の石材鑑定は信州大学理学部地質学科原山智教授にお願いした。
- 7 本書は、市澤英利調査部長、平林 彰調査第二課長の校閲のもと、桜井秀雄が執筆及び編集を行った。
- 8 本書で報告した記録類及び出土遺物は、本書刊行後に白田町教育委員会へ移管する。
- 9 発掘調査及び報告書作成にあたり、次の諸氏にご指導・ご支援を賜った。ご芳名を記して感謝の意を表したい。（敬称略・順不同）
井出正義、白田武正、角張淳一、川上元、倉沢正幸、須藤隆司、奥水太伸、高柳正人、富沢一明、原山智、福島正樹、藤森英二、白田町教育委員会

凡 例

- 1 遺物遺構図・遺物図のスクリーントーン等の表現は下記の通りである。

(1) 遺構図



地山



礫



粘土



攪乱

(2) 遺物図



須恵器断面

- 2 本書に掲載した実測図および遺物写真は、原則として下記の通りである。その他の場合は図版中のスケールを参照していただきたい。

古墳実測図 1：100 土坑実測図 1：40 溝実測図 1：40、1：60 土器実測図 1：4、1：6

石器 2：3、1：3 土器写真 1：3 小型石器 3：4 打製石斧 1：3

- 3 土層・遺物の色調は「新版 標準土色帖」による。

目 次

巻頭図版

序

例言・凡例

目次

第1章 序説

第1節 保護協議から本調査に至るまで	1
1 保護協議	
2 発掘届と発掘の指示	
3 受委託契約	
第2節 発掘作業	1
1 発掘体制と諸準備	
2 調査範囲と調査区	
3 検出面の設定と遺構の精査	
4 記録の方法	
第3節 整理作業	5
1 整理作業の体制	
2 遺構の確定	
3 遺物整理の方法	
4 図面と写真等の記録整理方法	
5 報告書の作成	

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7

第3章 調査結果

第1節 遺跡の概観と調査の概要	17
第2節 基本土層	17
第3節 遺構と遺物	20
1 三分1号古墳と出土遺物	
2 土坑と出土遺物	
3 溝と出土遺物	
4 遺構外出土の遺物	

第4章 まとめ

写真図版

報告書抄録

第1章 序 説

第1節 保護協議から本調査に至るまで

1 保護協議

平成14年5月29日、白田町教育委員会は県教育委員会に対して、建設事務所が計画している主要地方道下仁田白田線田口バイパス建設事業地内に周知の埋蔵文化財包蔵地（三分遺跡）があるため、その保護措置について協議を希望する旨の依頼を寄せてきた。

県教育委員会は、平成14年8月21日に建設事務所、白田町教育委員会及び埋文センターを交えた保護協議を行い、事業の公共性から判断して遺跡の記録保存を行うこととした上で、次の事項について確認を行った。

- ・発掘調査は、建設事務所が埋文センターへ委託して行うこと。調査面積は、約8,000㎡であること。
- ・平成15年度に発掘作業、平成16年度に整理作業を行い、発掘調査報告書は平成16年度中に印刷発行すること。
- ・出土品及び諸記録は、報告書刊行後、白田町が保管・管理すること。

2 発掘届と発掘の指示

平成14年7月2日付14白建第225号で建設事務所長から通知のあった周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について、県教育委員会教育長が同年7月10日付14教文第18-47号で、記録の作成のための発掘調査を埋文センターに委託の上実施する旨の通知を行ったことにより、主要地方道下仁田白田線田口バイパス建設事業に係る白田町三分遺跡の発掘調査を埋文センターが実施することが正式に決定した。

これを受けて、埋文センターでは平成15年4月1日付15長埋第11-20号で県教育委員会にて文化財保護法第57条に基づく発掘届を提出し、同年4月14日付15教文第8-20号により教育長から調査許可を受けた。

3 受委託契約

建設事務所と埋文センターとの契約内容は次表のとおりである。

	平成15年度	平成16年度
内 容	発掘作業、基礎整理作業	本格整理作業、報告書刊行
期 間	平成15年4月1日から 平成16年3月20日まで	平成16年5月24日から 平成17年3月10日まで
契 約 額	30,202,000円	9,209,000円

第2節 発掘作業

1 発掘体制と諸準備

発掘作業の体制と期間、面積等は次の通りである。

- ・体制 所長：深瀬弘夫 副所長：原 聖 管理部長補佐：上原 貞
調査部長：市澤英利 調査第1課長：廣瀬昭弘

調査研究員：桜井秀雄、中野充一、河西克造

発掘補助員：由井千代子、宮沢くに子、小須田実、竹内利子、志摩志津江、加藤さだ子、井出芳二、加藤紀子、勝俣徳一（以上、佐久広域シルバー人材センター白田支所会員）、平林明子

指導・協力：井出正義、白田武正、角塚淳一、川上 元、倉沢正幸、奥水太伸、須藤隆司、高柳正人、富沢一明、藤森英二、白田町教育委員会（五十音順、敬称略）

・発掘作業期間 平成15年4月7日～9月30日

・基礎整理期間 平成16年1月4日～3月17日

・面積 8,000㎡

発掘作業に際し、期間内における資料と機材の保管及び休憩施設として、調査区内に現場事務所を設置した。表土剥ぎ、トレンチ掘削、排土移動等では大型機械（重機及びクローラードンプ）をオペレーターとともに借り上げて用いている。

2 調査範囲と調査区

白田町教育委員会が実施した埋蔵文化財包蔵地の詳細分布調査によると、遺跡は約30,000㎡という広大な面積を有する。今回の下仁田白田線田口バイパス建設予定地は、長さ約540m、幅約15mほどをはかり、遺跡のはほぼ中央を東西に横断するものであり、記録保存を必要とする面積は8,000㎡であった。

調査区が東西に細長いため、便宜的に南北を横切る現道を境として①～③区に分けて調査を進めることとした。ところが、調査開始後に行った地元での聞き取りにより、遺跡範囲外にあたる田口用水東側にも遺跡が伸びている可能性が出てきたため、埋文センターは建設事務所と協議し、田口用水から大町川に至る約180m間にトレンチを設けて、改めて遺跡の範囲を把握することにした。なお、田口用水東側部分は④区とした。

①区～③区については、重機によって表土を剥ぐ前に、先行して試掘トレンチを入れ、遺構の分布状態を把握した。その結果、②区では湧水の激しい箇所があり、遺構も確認されなかったため、トレンチ調査で終了した部分もある（トレンチ1～7）。

以上のような試掘結果を踏まえ、排土置き場を確保する必要性から、各調査区はさらに細分して調査を行うことにした（第1図）。

重機による表土剥ぎは、まず①-1区、①-2区東半部、②-4区、②-5区について行い、順次遺構検出を進めたが、途中で④区が加わることになることを最優先した。続いて、①-2区西半部、②-1・2・3区、③-1・3・4区の表土剥ぎ、遺構検出作業に移った。③-2区については用地収用の関係上、最後に着手することとなった。

3 検出面の設定と遺構の精査

表土剥ぎに先行して遺構の有無と遺物の出土層位を把握する目的で、調査対象地全域に重機でトレンチを掘削した。その結果、耕作土（1層）及び黒色土（2a層・2b層）を剥いだ直下のローム層（4層）で落ち込みが確認されたことから、この面を検出面とした。なお、③-1区の一部では1・2層の下に砂層（3層）の堆積が認められた。

検出面設定後、重機による表土剥ぎを実施した。発掘補助員による遺構検出は①・②・④区では4層の上面で行い、縄文及び近世の遺構・遺物を検出した。

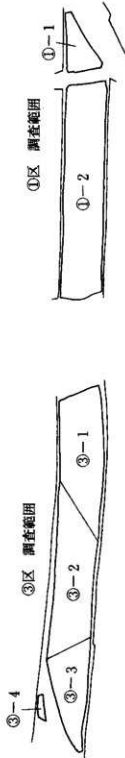
ところが、用地収用の関係上最後まで残った③-2区については、③-1区および③-3区の調査を通



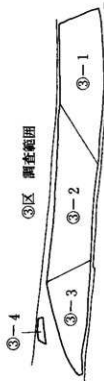
④区 調査範囲



①区 調査範囲



③区 調査範囲



②区 調査範囲



第1図 調査範囲

じて、2c層中から掘り込まれた古墳の周溝の存在が明らかとなった。2c層は③-2区と③-1区の一部にのみ分布しており、遺物包含層であった。そのため③-2は重機による表土剥ぎを1層のみにとどめ、2c層中を発掘補助員によって少しずつ掘り下げながら遺構検出を行った。

土坑・陥し穴については基本的に覆土を二分割して掘り下げる方法を採用した。古墳周溝についてはサプトレンチを5箇所設定して周溝の掘り込みを確認しながら掘り下げていった。

4 記録の方法

遺跡の名称と記号

遺跡名は、県教育委員会作成の遺跡台帳に記載されている「三分遺跡」とした。発掘調査及び整理事業の便宜上、大文字アルファベット3文字で表記される遺跡記号「DMB」を用いている。3文字の1番目は長野県内を9地区に分けた地区記号で白田町が該当する「D」、2文字目は遺跡をローマ字表記した「MIBUN」の「MB」とした。この記号は本遺跡に関する遺物及び図面、その他すべての記録で使用している。

調査区(グリッド)の設定と略称

発掘調査に当たって調査区(グリッド)を設定している。調査対象地に国土地理院の平面直角座標系の原点第Ⅷ系(長野県はⅧ系、X=0,000、Y=0,000)を基点に200×200mの区画を設定し、これを大々地区とした。大々地区はローマ数字を用いた。

大々地区内を25区画(40×40m)に分割し大地区とし、さらに大地区を25区画(8×8m)に分割し中地区を設定した。測量基準杭は中地区のメッシュを基本とし、測量業者に委託して設定した。調査で検出された遺構の記録及び遺物の取り上げは、遺構の個別名のほかは中地区の基準杭、グリッド名称を用いた。また一部業者委託の単点測量による作図も併用した。

遺構の名称と遺構記号

調査では、遺跡記号と同様に遺構についても記録と遺物の注記等の便宜を図るための記号を用いている。この記号は基本的に検出時に決定するため、主として平面形や分布の特徴を指標としており、必ずしも個々の遺構の性格を示すものではない。遺構番号は、時代等に関わらず種類ごと、検出順に付けた。混乱を避けるため、一旦、付けたものは原則として遺構記号・遺構番号の変更はしていない。このため番号に欠番がある。

本書で用いた遺構記号には、以下の種類がある。

SM：古墳、墳墓	SD：溝
SK：ゴミ穴・貯蔵穴・墓穴・陥し穴などを 含めた土坑	SF：焼土

測量と写真撮影

遺構の測量は簡易造り方測量により、調査研究員が行った。

図面の縮尺は、個別遺構図と土層図を1：20で作成した。トレンチ掘削地点、土層断面記録地点は、全体図や地形図とともに業者委託の単点測量で作成した。

遺構等の撮影は、マミヤRB(6×7)とニコンFM2(35mm)を併用し、ともにモノクロプリント(ネオパン)とカラーリバーサル(フジクローム)で撮影した。撮影はすべて調査研究員が行った。現像と焼付は業者委託とした。また、地上からの撮影では把握できない遺跡の全景や周辺地形の状況などを記録するために測量委託業者による空中撮影を3回実施した。

発掘日誌(抄)

- 4月7日(月) 重機によるトレンチ調査を開始する。
- 4月10日(木) 重機による表土剥ぎを開始する。
- 4月21日(月) 本日より作業員従事を開始する。①～③区に分けた調査範囲のうち、①-1区の検出作業から始める。
- 4月24日(木) 白田建設事務所と調査対象面積境に流れる田口用水東側部分の取り扱いについて協議し、④区として調査範囲に加えることとなる。
- 5月6日(火) 本日より桜井が合流、河西は唐松B遺跡の調査へ入る。
- 5月13日(火) 本日で④区を引き渡す。
- 5月28日(水) ②-4・5区の調査にはいる。
- 6月10日(火) 第1回目の空中撮影を実施する。
- 6月18日(水) ②-1・2・3区の調査にはいる。
- 6月30日(月) 県教育委員会文化財・生涯学習課金原正係長、綿田弘実指導主事、白田町教育委員会高柳係長、大工原主査が来訪。
- 7月2日(木) ③-1・3区の調査にはいる。
- 7月8日(火) ①-2区西半分の調査にはいる。
- 8月5日(火) 第2回目の空中撮影を実施する。
- 8月7日(木) 残件であった③-2区のマメ畑部分が解決し、本日より表土剥ぎにはいる。
- 8月21日(木) 2c層の掘り下げ作業にはいる。
- 9月2日(火) 2c層中から土器・礫が出土し、円形を呈するものの可能性が出てくる。
- 9月8日(月) 溝状の掘り込みを確認し、古墳の周溝であることが判明した。礫は外護列石であると考えられる。
- 9月11日(木) 第3回目の空中撮影を実施する。白田町文化財調査委員10名が来訪する。
- 9月18日(木) 本日で作業員従事は終了する。
- 9月30日(火) 器材の撤収・搬出を完了し、すべての作業を終了した。

第3節 整理作業

1 整理作業の体制

整理作業の体制と期間は次の通りである。

- ・体制 所長：小沢将夫 副所長：藤岡俊文 管理部長補佐：上原 貞
 調査部長：市澤英利 調査第2課長：平林 彰 調査研究員：桜井秀雄、河西克造
 整理補助員：近藤朋子、市川ちず子、大林久美子、加藤麻子、高橋康子、日向富美子、柳原澄子、
 小根山貞子、倉石志のぶ、今井博子、白田知子、黒岩美枝、齋藤いづみ、矢島美雪
 指導・協力：原山 智(敬称略)
- ・期間 平成16年9月1日～3月10日

2 遺構の確定

遺構の記号及び番号は、基本的に発掘作業時に認定したものを踏襲している。基礎整理では、遺構の位置、規模、形状、時期および属性などの再検討を行い、その結果は遺構台帳(一覧表)を作成して、本格整理の際に活用した。なお、遺構と認定できないと判断した落ち込みが4基(SK22、SK32、SK41、SD6)と焼土跡2カ所(SF01、SF02)があり、これらは欠番とした。

3 遺物整理の方法

遺物の洗浄・注記は原則として現場事務所で行った。整理作業では接合・復元を行い、報告書掲載遺物を抽出し、台帳を作成した。抽出に当たっては、遺物の観察をした後、図化可能なものを選び出し、できる限りの図化を目指した。台帳をもとに掲載遺物の実測、拓本、撮影を行い、図版(アナログ)を作成した。報告書作成と同時に遺物の収納作業も行った。

4 図面と写真等の記録整理方法

図面は、発掘作業後の基礎整理段階に、記載内容や図面相互を点検・修正し、本格整理段階に遺構単位トレースや図版作成の素図となる第2原図を作成した。さらに個々の図面に番号を付け、掲載遺構を記載

した図面台帳を作成した。この台帳が報告書作成時もしくは収納時において図面の検索台帳の役割を果たすものである。

写真(モノクロ・リバーサル)は、基本的に撮影順にファイルに整理した。ただし、35ミリカラーリバーサルは、整理作業の関係上、遺構単位に並び替えて整理してある。現場で記録した撮影台帳とは別に、整理時に写真台帳を作成した。

その他の整理は、上記の他に測量業務委託の成果簿、空中写真ネガ、調査日誌、整理日誌、現場で作成した遺構・写真台帳、遺構所見カードなどがある。これら諸記録も整理・収納した。

5 報告書の作成

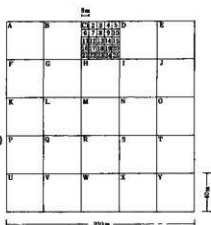
今回の調査では、縄文時代の石器を出土した溝1本と土坑1基、近世の陶磁器を出土した土坑1基、周溝のみが検出された古墳、この他に時期不明の土坑41基と溝10本が遺構として確認された。新たに発見された古墳は、雨川南岸地域の三分地籍では初めての事例ということとなり、田口地区の歴史をひもとく上で大きな意味をもつと考えられる。これらの遺物は可能な限り資料化し報告書に掲載するよう努めた。

整理日誌(抄)

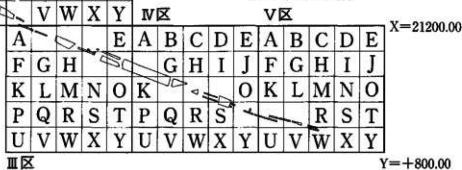
平成16年	平成17年
9月1日 整理作業開始。	1月～2月 遺物図版組、図版作成。原稿執筆。
9月～ 遺物接合・復元。掲載遺物抽出。	遺物写真撮影。
10月～ 遺物実測・拓本・トレース。	1月31日 報告書入札。
11～12月 遺構図・全体図・土層図・遺構分布図等トレース、第2次原因図チェック。原稿執筆。	2月～3月 報告書校正。記録類の整理・収納。
	3月4日 発掘調査報告書刊行。



大々地区割付



大・中地区割付



第2図 地区割付・グリッド

第2章 遺跡の位置と環境

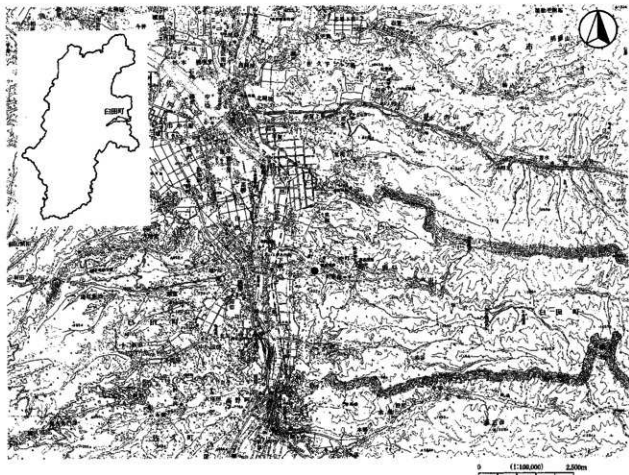
第1節 遺跡の位置と地理的環境

三分遺跡は、長野県南佐久郡白田町三分地籍うすのぼりさんぶんに所在し、JR小海線白田駅から東方へおよそ1kmに位置する。

遺跡の北側は田口峠付近を源流とする兩川が流れ、南は佐久山地の西へ伸びる支脈の尾根のひとつによって画されている。遺跡は、兩川によって形成された沖積地および佐久山地支脈の山麓台地上に展開している。

第2節 歴史的環境

白田町は、白田地区（旧白田村・下小田切村・勝間村）、切原地区（旧湯原村・中小田切村・上小田切村・中小田切新田村）、田口地区（旧田野口村・上中込村・大奈良村・三分村・清川村・下越村）、青沼地区（旧入沢村および平林村の岩水地籍）に分けられる。田口地区には、三分地籍・原地籍・清川地籍・大奈良地籍・宮代地籍・上中込地籍・丸山地籍・川原宿地籍・下町地籍などの地籍がある。ここでは三分



第3図 三分遺跡 位置

遺跡の所在する田口地区の遺跡を概観する。

旧石器時代・縄文時代

三分地籍の井上遺跡から、ほ場整備の際に、旧石器時代末から縄文時代草創期にかけてみられる棒形柴屋局部磨製石斧が1点採集されている。また、原地籍の原遺跡からは柳又型有舌尖頭器が1点採集されている。町内でも当該期の遺跡はこの2カ所のみであるが、いずれも千曲川右岸の沖積地からの出土であることが注目される。

早期の遺物は田口地区のみならず町内の千曲川右岸地域では現在までのところ確認されていない(註1)。

前期の遺跡も田口地区では少ないが、著名なものとして清川地籍の芦内岩陰遺跡がある。昭和39年に藤沢平治氏・樋口昇一氏により発掘調査が行われており、当該期の遺物が多く出土している。また沖積地の井上遺跡でも前期初頭の土器が発掘調査によって出土している(白田町教委1980)。この時期には山間部から沖積地に至るまで遺跡は広く分布してきたことがわかる。

遺跡の数は中期にピークを迎える。発掘調査が実施された遺跡には、大奈良地籍の大奈良遺跡、宮代地籍の大工原遺跡、上中込地籍の離山遺跡などがある。大奈良遺跡では、中葉～後葉の住居跡17軒および約4000点を数える打製石斧をはじめとする膨大な量の遺物が発見された。調査面積が1700㎡であることを考えると相当大規模な集落遺跡であることが予想される(註2)。大工原遺跡では中期の土坑1基の他、石製装身具などの遺物が認められ(白田町教委1993)、離山遺跡では中期後半から後期の土器片が少量ながら出土している(埋文センター2004)。このような調査事例から田口地区では雨川下流域の沖積地に比較的規模の大きい遺跡がみられ、また中流域では標高760m前後の新海三社神社周辺までが分布の中心となっていることが理解できる。

後・晩期には遺跡数は減少し、大奈良遺跡で堀の内式期の敷石住居跡が検出され、原遺跡や井上遺跡などで土器片等が確認されているにとどまる。

弥生時代

前期～中期前半の遺跡は田口地区では認められていない。離山遺跡では遺構外ではあるが中期後半および後期の土器片が出土し、原遺跡では後期の住居跡2軒が発掘調査により検出されている。また山間部の芦内岩陰遺跡でも後期の土器片が確認されている。このように後期になると遺跡数の増加して指摘できる。なかでも三分地籍では、中期後半・後期の土器片とともに石包丁や太形蛤刃石斧が採集された田中遺跡や後期の円形周溝墓の一部と思われる溝状遺構が検出された井上遺跡をはじめ、他にも遍照寺遺跡や荒巻遺跡でも土器片が確認されており、町内で最も後期遺跡が集中する地域である。

古墳時代

田口地区は町内でも古墳の集中してみられるところであり、上中込地籍の離山古墳1号～3号、原地籍の幸神古墳群12基、宮代地籍の新海三社神社周辺に7基など計27基が存在する。これに加えて、今回の調査では周溝のみの検出であったが、新発見の古墳(三分第1号古墳)が発見され、田口地区では28基を数えることとなった。雨川南岸では初めての古墳ということになる。いずれも6世紀以降の後期古墳である。

これに対して集落遺跡の調査例は少ないが、それは当該期の発掘調査事例があまりないことに起因するものと考えられる。注目される遺跡としては、井上遺跡と大奈良遺跡などがある。井上遺跡では昭和48年に発掘調査が行なわれ、中期住居跡1軒、後期住居跡3軒などが検出されている。部分的な調査であったためさらに規模の大きな集落遺跡になることも予想される。また大奈良遺跡では5～6世紀代の住居跡3軒が検出されており、離山遺跡では遺構には伴わないものだが5・6世紀代の土器片が多量に出土している。

古代

『和名類聚抄』には佐久郡内の郷について、美理・大村・大井・刑部・茂里・小沼・青沼・余戸の8郷が記されている(註3)。「南佐久郡誌 考古編」では、このうち千曲川右岸地域の志賀川を北限、羽黒山を南限とする地域を青沼郷に想定しており、これに従えば、田口・青沼地区がほぼこの地域にあたる。

田口地区の遺跡数は町内でも群を抜いており、雨川の谷口扇状地には広大な面積を有する原遺跡や大奈良遺跡などが存在し、また雨川右岸の山麓沿いには、明法寺遺跡、影丸山遺跡など11余の遺跡がほぼ連続して認められている。縄文遺跡と重複する遺跡が多いのも当該期の遺跡分布の特徴である。

発掘調査されたものとしては、原遺跡、宮代地籍の宮東遺跡などがある。原遺跡では古墳時代末期から奈良時代の住居跡6軒、平安時代の住居跡2軒等が検出された(白田町教委1989)。宮東遺跡では、鍛冶工房跡を含む平安時代の住居跡8軒と掘立柱建物跡4棟が検出された。住居跡からは鉄鐸1点が出土している。なお鉄鐸は原地籍の幸神2号古墳からも1点出土している(白田町教委1996)。また前述した雫山遺跡では9世紀後半に比定される水田跡が検出されている。

なお、特筆すべき遺物には清川地籍の上原氏宅庭から明和3(1766)年に出土した「物部椿丸」と刻まれた銅製私印があげられる。9世紀以降の年代が与えられている(平川2002)。

中世

中世には田口氏の活躍が知られ、その居城である田口城跡は雨川北岸の比高約130mの東方から伸びる尾根上に築かれている。田口氏は天文17年(1548)に滅亡し、その後は、相木氏系の依田能登守を経て、徳川方の依田信蕃が居城とした。三分地籍の岩崎岩城跡は岩崎山頂にあり、天正10年(1582)に徳川方についた津金兼が陣をおいたとの伝承がある(白田町教委1988)。大工原遺跡では礎石状の台石などが発掘調査により出土し、新海三社神社との関連性が指摘されている(白田町教委1996)。三分地籍から入沢地籍にかけての山麓沿いには、遍照寺遺跡、荒巻遺跡などの中世遺跡が認められている。

新海三社神社三重塔・東本社は室町時代の建築物であり、国重要文化財である。新海三社神社は境内2万3千坪、社有林27町5段6畝を有しており、佐久三十六郡の総社といわれている。源頼朝による社殿の修理再興の口伝があるが、創建年代は不明である。延喜式に記載された式内社にはその名前はないため、それ以降の創建であると考えられる。社内には御魂代石と呼ばれる石幢形の石造物があり、延文3年(1358)の年号が記されている。また川原宿地籍の上宮寺には南北朝時代初期の作といわれる泉宮の梵鐘がみられる(白田町教委1992)。本遺跡の周辺では、岩崎観音堂参道のかたわらに中世の造立とみられる磨崖石仏群がみられる。

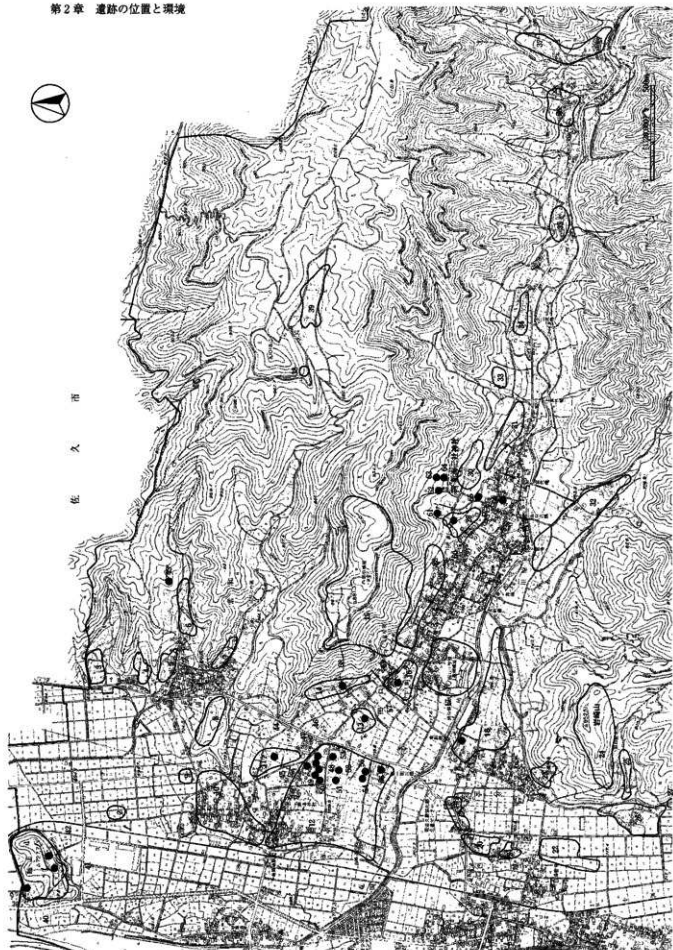
近世

三分村は中世には田口郷に属していたものと考えられており、依田康国領、徳川忠長領を経て、宝永元年(1704)に三河奥殿藩主松平乗真の佐久領となった(註4)。松平氏の本拠は三河にあり、これとは別に佐久領として25村一万二千石が与えられ、田野口には宝永6年(1710)から陣屋が置かれた。三分村はその一村であった。

本遺跡の周辺では近世に位置づけられる大日如来の坐像を納めた大日宝塔が岩崎山にみられている。

田口用水は元禄年間に完成したものであり、川原宿から佐久町海瀬の抜井川の取り入れ口までの約10kmの用水である。この用水の完成により田口地区の水田面積は上昇することとなった。

三河に本拠を置いていた松平氏は11代乗真が藩主になると、田野口に本領移転することを文久3年(1863)に願い出て、奥殿藩の名を改めて田野口藩とした。籠岡城跡は翌元治元年(1864)に着工し、3年かけて建設したものである。全国で2例しかない星形城郭として著名であり、昭和9年に国史跡の指定を受けている。現在、内城は田口小学校の敷地となっている。



第4図 周辺の遺跡

	遺跡名	所在地	時 代					中世	近世	備 考
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安			
1	麓山遺跡	上中込		○	○	○	○		平成14年度発掘調査	
2	中反田遺跡	大奈良				○	○			
3	金原遺跡	清川			○		○			
4	はかせ久保遺跡	清川					○			
5	清川遺跡	清川		○			○			
6	清川入遺跡	清川			○	○	○			
7	青沢地下遺跡	清川			○	○	○			
8	脇白山遺跡	大奈良		○	○	○	○			
9	芝浜遺跡	清川		○						
10	大奈良遺跡	大奈良		○	○	○	○		平成15・16年度発掘調査	
11	山崎遺跡	大奈良			○	○	○			
12	原遺跡	原			○	○	○		昭和63年度発掘調査 平成15年度試掘調査	
13	新塚遺跡	下町			○	○	○			
14	明法寺遺跡	下町		○	○	○	○			
15	田口城跡	城山						○		
16	五塚遺跡	下町		○	○	○	○			
17	龍岡城跡	下町						○		
18	三分遺跡	三分		○	○	○	○		平成15年度発掘調査	
19	西塚田遺跡	三分			○	○	○			
20	田中遺跡	三分		○	○	○	○			
21	戸井口遺跡	三分		○	○	○	○			
22	井上遺跡	三分		○	○	○	○		昭和48年度発掘調査	
23	遍照寺遺跡	三分		○	○			○		
24	岩崎野城跡	三分						○		
25	小山沢遺跡	三分		○						
26	荒巻遺跡	三分			○	○	○			
27	山照遺跡	入沢			○	○	○	○		
28	神原・道場遺跡	下町		○	○	○	○	○		
29	英田地煙遺跡	宮代			○	○	○	○		
30	宮東遺跡	宮代		○	○	○	○	○		
31	大工原遺跡	宮代			○	○	○	○	平成4年度発掘調査 平成4年度発掘調査	
32	山口遺跡	川原宿		○	○	○	○			
33	明経遺跡	宮代			○	○	○			
34	日向大工原遺跡	宮代			○	○	○			
35	丸山下遺跡	丸山			○	○	○			
36	丸山上遺跡	丸山			○	○	○			
37	影丸山遺跡	丸山					○		平成7年度発掘調査	
38	芦内岩陰遺跡	清川		○	○				昭和39年度発掘調査	
39	芦内遺跡	清川		○					平成5年度試掘調査	
40	麓山3号古墳	上中込				○				
41	麓山2号古墳	上中込				○				
42	麓山1号古墳	上中込				○				
43	清川入古墳	清川				○				
44	山崎古墳	大奈良				○				
45	幸神3号古墳	原				○				
46	幸神2号古墳	原				○			平成6年度試掘確認調査	
47	幸神1号古墳	原				○			平成6年度試掘確認調査	
48	幸神6号古墳	原				○			平成7年度試掘確認調査	
49	幸神5号古墳	原				○			平成7年度試掘確認調査	
50	幸神4号古墳	原				○			平成6年度試掘確認調査	
51	外九間1号古墳	原				○			平成6年度試掘確認調査	
52	外九間3号古墳	原				○			平成7年度試掘確認調査	
53	外九間2号古墳	原				○			平成7年度試掘確認調査	
54	中原2号古墳	原				○			平成7年度試掘確認調査	
55	中原1号古墳	原				○			平成6年度試掘確認調査	
56	中原3号古墳	原				○				
57	新塚古墳	下町				○				
58	明法寺古墳	下町				○				
59	五塚古墳	下町				○			平成7年度試掘確認調査	
60	英田地煙古墳	宮代				○			昭和40年度発掘調査	
61	新海神社西御殿古墳	宮代				○			平成7年度試掘確認調査	
62	新海神社中御殿古墳	宮代				○			平成6年度試掘確認調査	
63	新海神社東御殿古墳	宮代				○			平成7年度試掘確認調査	
64	新海神社新発見古墳	宮代				○			平成7年度試掘確認調査	
65	上宮代2号古墳	宮代				○				
66	上宮代1号古墳	宮代				○				

表1 周辺の遺跡

近・現代

清川村、山田村、北沢村は明治7年に合併して常和村となり、また田野口村、上中込村、大倉良才村は明治9年に合併して田口村となった。明治22年には町村制施行に伴い合併が進み、田口村、三分村、^{しもごん}下越村の3村と常和村のうちの旧清川村分が田口村となった。

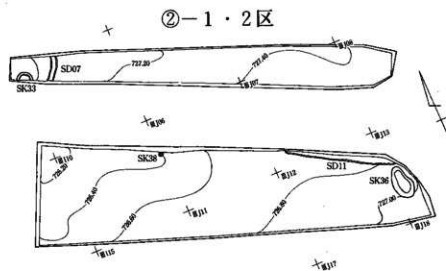
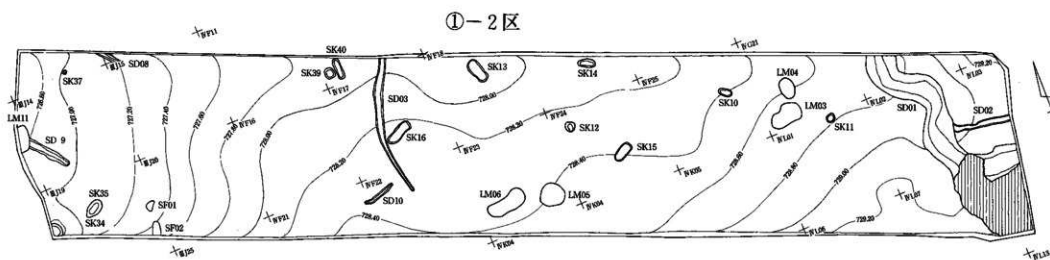
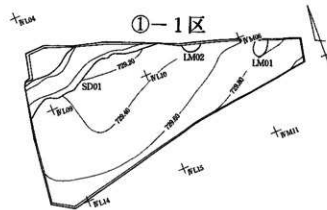
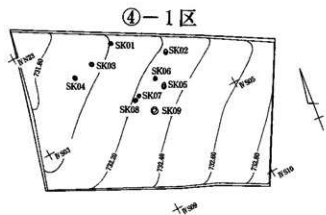
昭和30年の町村合併促進法施行による昭和の大合併で、田口村と青沼村は田口青沼村となり、昭和32年には新市町村建設促進法を背景に、白田町と田口青沼村が合併して、白田町となった。そして平成17年4月1日をもって、佐久市、浅科村、望月町と合併し、佐久市となることが決まっている。

注

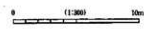
- 1 白田町誌編纂委員会藤森英二氏のご教示による。
- 2 佐久市教育委員会須藤隆司氏のご教示による。
- 3 『和名類聚抄』には佐久郡の郷については訓読がついていないため、各郷名の正しいよびかたについては不明である。
- 4 なお、田口地区は田口峠の分水嶺を越えた東方に位置する馬坂地帯まで広がっているが、これには興味深い口碑がある。それは「田口の殿様と高崎の殿様と境界をきめるとき、日を約束して出発し出あったところを境とすることにした。田口の殿様は早起きして馬で峠を下り、途中炭をいけたり、手の形をつけて、後の日の証拠をつくっていった。高崎の殿様は寝ぼけして牛に乗ってのぼってきた。そして出あったのが今の県境である。そのとき高崎の殿様は『まさか、早いなあ』といった。それからこの土地を馬坂というようになったという(白田町教委1979)ものである。また、「田野口藩の殿様と幕府の代官が国境を決めるに当たり、夜明けとともに両方から競走し、出会ったところを境にしよう」と約束した。信州側の田野口藩の殿様は、暗いうちに聞こえよときの声をあげさせて早く出発したため、峠を越えた関東側にも境界を拡大することができた」との口碑もある(市川1972)。

引用参考文献

- 市川健夫1972『信州の峠』第一法規
- 井出正義・白田郁雄・小淵武一・木内寛1997『佐久の城』郷土出版社
- 白田武正2004『弥生時代の白田町』『白田町誌編纂年次報告 第五集 平成十五年度』白田町誌編纂委員会
- 白田町教育委員会1979『白田町の口碑伝説』『白田町の文化財』
- 白田町教育委員会1980『井上遺跡』
- 白田町教育委員会1987『勝間原遺跡』
- 白田町教育委員会1988『白田町遺跡詳細分布調査報告書』
- 白田町教育委員会1989『原遺跡』
- 白田町教育委員会1992『白田町の文化財』
- 白田町教育委員会1993『宮東・大工原遺跡』
- 白田町教育委員会1994『白田町戸内開発地区試掘調査報告書』
- 白田町教育委員会1994『影丸山遺跡』
- 白田町教育委員会1996『幸神古墳群』
- 川上 元2001『白田町の考古遺跡の分布』『白田町誌編纂年次報告 第二集 平成十二年度』白田町誌編纂委員会
- 川上 元2002『白田町の考古遺跡の分布』『白田町誌編纂年次報告 第三集 平成十三年度』白田町誌編纂委員会
- 佐久考古学会1990『佐久考古6号 赤い土器を追う』
- 佐久市志編纂委員会1997『佐久市志 歴史編(一)』
- 長野県埋蔵文化財センター 2004『国補緊急地方道路整備B業務(主)川上佐久線埋蔵文化財発掘調査報告書—白田町内—離山遺跡』
- 平川 南2002『長野県内出土・伝世の古代印の再検討』『長野県考古学会誌99・100号』
- 南佐久郡誌編纂委員会1998『南佐久郡誌 考古編』



SK : 土坑
 SD : 溝
 LM : ロームマウンド
 SF : 焼土



第5図 遺構配置図(1)

第3章 調査結果

第1節 遺跡の概観と調査の概要

三分遺跡は、南佐久郡白田町三分636-2番地ほかに所在する。小字では塚畑、谷地、北平塚、尾入海道などがある。遺跡の総面積は約30,000㎡を有する。発掘調査が実施されたのは今回が初めてであるが、昭和40年代後半頃に地元の高校生により、縄文中期土器、打製石斧、古墳時代から平安時代の須恵器・土師器等が採集されている。これらの遺物は現在、白田町文化センターに展示されている。また、町教育委員会が昭和61～63年度に実施した遺跡詳細分布調査では古墳時代から平安時代の土師器が認められている(白田町教委1998)。

今回の調査範囲は、第1章で述べたように、遺跡のほぼ中央部を東西に横切る細長いものであったため、南北を横切る現道を境として、便宜的に①～③区および調査開始後の協議により調査範囲に加えることとなった④区の計4地区に分けて発掘調査を実施した。さらに各調査区は工程にあわせて細分した。

①区では土坑12基、溝6本を検出した。焼土跡も2カ所みつかったが、遺構としては認定しなかった。ただし遺構配置図には位置を示してある。1号溝(SD01)から縄文時代の石器(打製石斧等)が出土した他には、遺構に伴う遺物は認められなかった。遺構外からも縄文時代の土器片と石器が少量出土したにとどまった。

②区では土坑17基と溝5本を検出した。ここでも遺物を出土する遺構は少なく、縄文時代の石器を伴った30号土坑(SK30)と近世磁器片を伴った33号土坑(SK33)を数えるのみであった。遺構外からの遺物の出土もみられなかった。また②区は「谷地」という小字名が示す通り、湧水が激しい箇所がみられ、トレンチ調査で終了した部分がある(トレンチ1～7)。

①区、②区、③-1・3区、④区での調査面は1面であったが、③-2区では他にみられない黒色土(基本土層の2c層)が堆積し、これを掘り込む煙滅古墳の周溝を検出した。白田町教育委員会で実施した詳細分布調査でも古墳の存在は確認されており、未周知の古墳を発見したことになった。

④区では土坑9基が検出されたが、遺構内外ともに遺物はなかった。

調査区全体でも、遺構の分布は散漫である。特に②-5区と③-1・3区での遺構密度は非常に低い。遺物についてみれば、③-2区の前溝周溝を除くと、遺物の出土は極めて少なく、特に出土が集中する地点はみられない。

第2節 基本土層

今回の調査地は南北約15m、東西約540mと、東西に細長く、標高は④区(約733m)から③区(約720m)へ向けて約13m余りの高低差がある。また、雨川の扇状地という立地条件から生じる地形形成の複雑さも一因となり、土層堆積は観察箇所によって著しい相違がある(第7図)。

1層は耕作土である。直下の2層は黒色土であるが、観察箇所によって3つに細分される。2a層は黒色(10YR1.7/1)土で、しまりはやや弱い。φ2～3cm程の砂礫がわずかに含まれる。少量であるが縄文時代の遺物が認められる。2b層も黒色(10YR1.7/1)土だが、φ2～5cm程の砂礫が主体を占める。黒色土混じりの砂礫層である。遺物は認められない。また、②-5区の4号溝付近では、軽石の混じる箇所もみられ、これは2b'とした。2c層は黒色(7.5YR2/1)土で、やや粘性をもつ。③区でのみ認められるもので古墳

第3章 調査結果

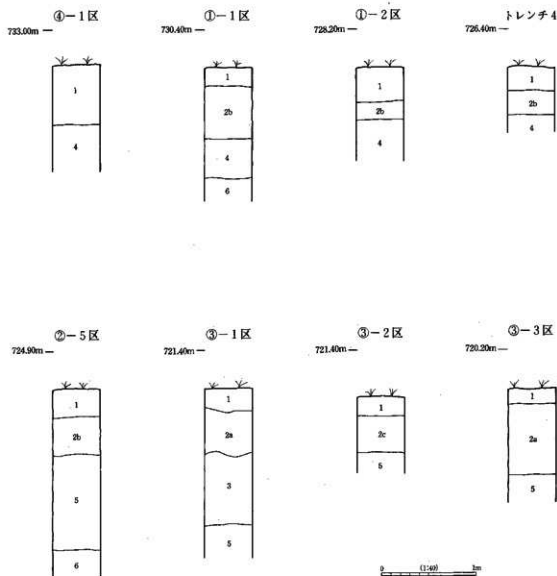
周溝は本層を掘り込んでいる。③-2区では本層上面を第1調査面とした。

3層は黄褐色（10YR5/6）砂層であり、③-1区の一部でしか認められないものである。

4層はにぶい黄褐色（10YR5/4）・明黄褐色（10YR6/6）を呈すローム層であるが、本層がみられない箇所も多い。本層は二次堆積のロームと考えられる。①区・②区・④区では本層上面を第1調査面とした。

5層は砂礫層であり、4層の堆積がみられない③-1区では本層上面を第1調査面、また2c層で第1調査面を設定した③-2区では、本層上面を第2調査面とした。

6層は②-5区において重機による深掘りトレンチで確認されたもので褐灰色（10YR6/1）粘土層である。



第7図 基本土層

第3節 遺構と遺物

1 三分第1号古墳と出土遺物〔第8・16～18図 PL1・2・3〕

位置：③-2区のI-M-8・9・10・13・14・15・18・19・20グリッドに位置する。

検出までの経過：現況はマメなどを栽培する畑地であり、すでに墳丘は失われていた。調査対象地全域については、面的に表土剥ぎを行う前段階として、重機による先行トレンチをいれたが、この段階では古墳周溝の存在は知りえなかった。先行トレンチをいれた箇所は周溝の掘り込みが浅く、礫や遺物の出土がほとんどみられなかったこともあったが、調査ミス認めざるをえない。

③区のうち本古墳の存在する部分(③-2区)については、用地取用の都合で調査は最後に行なうことになり、東西両側部分(③-1・3区)を先に着手した。このうち東側部分については、①区・②区・④区での知見から同様に1面調査であると思ひ込み、4層上面まで掘り下げてしまった。ところが、この掘り下げた2c層から少なからずの遺物が出土したため、北壁の精査を実施したところ、2c層から掘り込まれた落ち込みを確認するに至った。溝の可能性が高いと考えた。したがって本古墳の存在する部分(③-2区)については、重機による表土剥ぎは1層のみにとどめ、その後は人力により2c層中での検出を目指すこととなった。

北壁セクションでの土層観察も容易ではなかったが、2c層中での検出も困難を極めた。そこでトレンチを計5本いれ、土層観察を行い、また精査を繰り返すことによって、周溝を検出することができた。周溝からは礫と須恵器を中心とした土器が出土した。

規模・形状：前述の通り、墳丘はすでに失われており、主体部の石室も消滅していた。周溝は北西側で一部分掘り込みがみられなかったところがあるが、削平されたものか、当初から存在していなかったものかの判断はつかなかった。調査区内では全体の3分の2程度が確認されている。周溝の規模は推定の域をでないが、内法で16m前後、外法で20m前後をはかると推定できる。幅は約1.5～約2.7m、検出面からの深さは最大で60cm前後を測る。

出土遺物：周溝から出土した遺物(2～15)の他、前述したような調査ミスにより③-1区の表土剥ぎの際に認められた遺物については、③区1・2層出土としてとりあげたが(16～31)、出土層位や出土した地点が周溝の推定ラインにほぼ一致すること、また5のように接合する資料が存在することから、これらも本来は周溝に伴う遺物であると判断し、三分第1号古墳に伴う遺物として報告していく。ただし実測図の配列はSM01出土のもの③区1・2層出土のものを分けて掲示してある。

遺物はすべて土器である。須恵器が圧倒的に多く、甕(7・8・12・28～31)・壺(25)・平瓶(5・26)・甕(6・27)・坏(2・17～19)・有台坏(16)・坏蓋(20～23)・盤(24)がみられる。9～11は8の一部分であるが、線刻が施されているため、拓本資料も掲載する。5・25の平瓶は、口頸部を別に作り円盤状の粘土で閉塞する技法(風船技法のうちの円盤閉塞法)で作られており、また5には空気抜きの小穴が認められている。31の大甕は口縁部が大きくゆがんでいる。土師器は甕(4)・坏(3)などがみられるにすぎない。

これらの土器と伴出する礫は墳丘裾部に置かれた外護列石が崩落したものと考えられる。そして周溝から出土した土器についても、墳丘上に伴献されたものが周溝内に落ち込んだものと理解する。なお、14は平安時代の底部回転糸切り痕を残す坏であり、15は12世紀後半の画花紋青磁碗片である。また近世陶磁器片も数点認められたが、いずれも後世の混入と考える。

時期：平安時代以降の混入土器を除けば、7世紀後半に位置づけられよう。

2 土坑と出土遺物 [第9～12・16・19図 PL2～4]

土坑は調査区全体で42基検出した。形態等の特徴からA～Dまでの4類に分類した。30号土坑と33号土坑以外では遺物の出土はみなかった。以下、それぞれ代表的な土坑を記載していく。

A類 径60cm以下の円形を呈する土坑(17基) [第9図]

1号～9号・23～27号・29号・37号・38号土坑があてはまる。本類は④区(1号～9号)と②-3区(23号～27号、29号)に多く認められる。26号土坑は楕円形に近い形状を呈するが、周辺には本類の土坑が集中しているため、本類に含めた。断面形は1号土坑のように垂直に近い角度で立ち上がるものや皿状のものなどがあり、規則性はみられない。

1号土坑(SK01):④-1区のⅣ-N-23グリッドに位置する。重複関係はない。4層上面で検出した。径約30cmの円形を呈する。検出面からの深さは18cmを測る。覆土は黒褐色(7.5YR2/1)土の単層である。ローム粒・砂質土がわずかに混じる。

B類 径60cm以上の円形を呈する土坑(4基) [第10図]

11号・12号・18号・39号土坑があてはまる。本類の4基は、断面形がなだらかに立ち上がるもので、①-2区と②-5区に認められるが分布にきわだった特徴はみられない。

11号土坑(SK11):①-2区のⅣ-L-01グリッドに位置する。重複関係はない。4層上面で検出した。70×60cmの不整な円形を呈する。検出面からの深さは27cmを測る。覆土は2層に分けられる。1層は黒褐色(10YR3/2)土で、バミス粒やや含む。しまりはよい。2層は暗褐色(10YR3/4)土で、 ϕ 2～5cmの礫を多く含む。粘性があり、しまりもよい。

C類 楕円形を呈する土坑(16基) [第10・11図]

16基が該当し、さらに長軸200cmを境にそれより小さいもの(10号・14号・15号・19号・28号・35号・40号・42号)と大きいもの(13号・16号・20号・36号・43号～45号)に大別できる。規模の大きい類型では断面形状が垂直もしくはそれに近い箱形を呈するタイプが主体を占めている。例外は不整形の36号と、中段で屈曲し、傾斜を緩やかにしながらちあがる45号のみである。本類は、①-2区、③-1・2区に比較的多くみられるが、分布の特徴はつかめない。

14号土坑(SK14):①-2区のⅣ-F-19グリッドに位置する。重複関係はない。4層上面で検出した。140×67cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは30cmを測る。覆土は2層に分けられる。1層は黒褐色(10YR2/2)土で、バミス粒をわずかに含む。しまりはよい。2層は暗褐色(10YR3/4)土で、 ϕ 5mm程の礫をわずかに含む。黒褐土もブロックで混じる。粘性があり、しまりもよい。

44号土坑(SK44):③-1区のⅠ-S-08グリッドに位置する。重複関係はない。4層上面で検出した。約220×約105cmの不整な楕円形を呈する。検出面からの深さは50cmを測る。覆土は黒色(10YR1.7/1)土の単層で、しまりはやや弱い。

45号土坑(SK45):③-2区のⅠ-M-02グリッドに位置する。重複関係はない。4層上面で検出した。約250×約120～140cmの不整な楕円形を呈する。検出面からの深さは80cmを測る。覆土は3層に分けられる。1層は黒色(10YR2/1)土で、 ϕ 1～2mm大の砂粒が少量混入する。しまりはよい。2層は黒褐色(10YR3/2)土で、 ϕ 2～3cm大の礫が含まれる。ローム粒もみられる。3層は黒褐色(10YR3/2)土で、礫の混入が2層よりも多い。

D類 平面形態が不明なもの(5基) [第12図]

調査区外にかかるため平面形態が不明である17号・30号・31号・33号・34号が該当する。17号・30号・33号・34号は円形を、31号は楕円形を呈するとも推測できるが、はっきりしないため、ここでは本類として扱うことにする。

30号土坑 (SK30)：②-3区のⅢ-C-17・Ⅲ-C-22グリッドに位置する。重複関係はない。4層上面で検出した。南側半部が調査区外にかかるため、規模・平面形状は推定の域をでないが、径約210cmの円形を呈する可能性が高い。検出面からの深さは27cm測る。覆土は黒褐色土(10YR3/1)の単層で、しまりがある。湧水の激しい部分であり、掘り下げ作業には困難さを伴った。遺物としては黒曜石製の削器1点(第19図-1)が覆土より出土した。出土石器から縄文時代の所産と考える。

33号土坑 (SK33)：②-2区のⅢ-I-04・05グリッドに位置する。重複関係はない。4層上面で検出した。南側半部が現道にかかるため、規模・平面形状は推定の域をでないが、径約130cmの円形を呈する可能性が高い。検出面からの深さは65cmをはかる。土坑掘り方の内側には径約90cmの範囲に板材を用いた木枠が埋設され、木枠と掘り方の間は粘土で固められている。覆土は黒褐色土(10YR3/1)の単層で、しまりがある。遺物としては、覆土上層から伊万里碗片1点(第16図-1)が出土した。伊万里IV期に比定でき、18世紀後半に位置づけられよう。木枠があること、また湧水が激しく常に水が溜まっている状態であることから、水溜めである可能性が考えられる。

3 溝と出土遺物 [第13～15図 PL2・4]

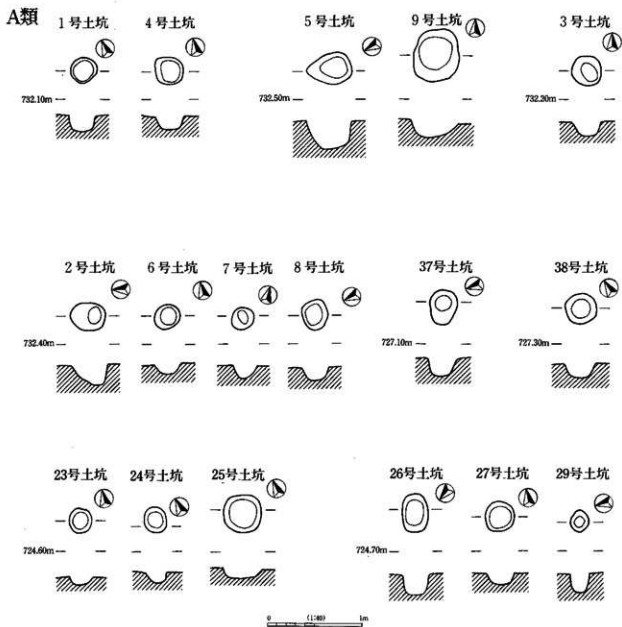
11本の溝を検出したが、1号溝を除いて他では遺物の出土はみられず、用途・性格も不明なものばかりであった。溝は①-1・2区、②-1・2・3区に認められるが、蛇行する1号溝を除くと、南北方向に伸びる3号・12号・7号の一群と東西方向に伸びる2号・5号・8号・9号の一群に大別できる。

1号溝 (SD01)：①-1・2区にまたがっており、Ⅳ-G-22、Ⅳ-L-02、Ⅳ-L-07、Ⅳ-L-04・05グリッド位置する。直角に近い角度で蛇行しながら南北に延びる。両方向とも調査区外にかかる。検出面からの深さは約35～約50cmを測る。SD02と重複するが、土色・土質の相違により本跡の方が新しいと判断できた。覆土は2層に分けられる。1層は黒褐色(7.5YR2/2)土で、バミスが全体に含まれる。しまりは非常に強い。2層は暗褐色(7.5YR3/3)土で、 ϕ 1～3cm程の礫を多く含む。砂質が強く、しまりはよくない。遺物は、打製石斧3点(第19図-2・3・6)と剥片1点(第19図-12)が出土した。打製石斧はいずれも欠損している。出土した石器がいずれも縄文時代の所産と考えられるため、縄文時代に比定するが、時期細分は難しい。

2号溝 (SD02)：①-2区のⅣ-L-02グリッドに位置する。SD01と重複し、土色・土質の相違により、本跡の方が古いと判断できた。ほぼ東西方向に延びるが、西側はSD01により切られ、東側は調査区外にかかる。調査範囲で検出された規模は、長さ約4.5m、幅約30～約50cmで、検出面からの深さは13cm前後を測る。覆土は黒色土(10YR2/1)の単層であり、しまりがある。

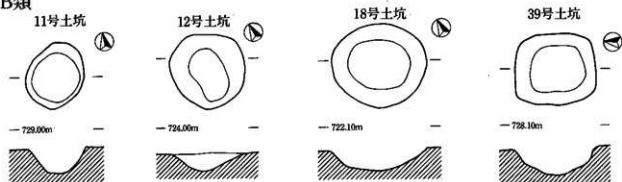
1号溝が縄文時代の所産であるならば、それに切られる本跡も縄文時代に比定されることになる。

4号溝 (SD04)：②-5区のⅠ-S-14・15グリッドに位置する。ほぼ東西に延びるが、両方向とも調査区外にかかる。調査範囲で検出された規模は長さ約7m、幅約80～約230cmで、検出面からの深さは約40cm前後を測る。覆土は3層に分けられる。1層は黒褐色(10YR2/2)土で、よくしまる。 ϕ 5mm程の礫が全体に少量混じる。2層はにおい黄褐色(10YR4/3)土で、ローム土や小礫の混入もみられる。しまりは強い。3層は暗褐色(10YR3/3)土で、砂質が強い。

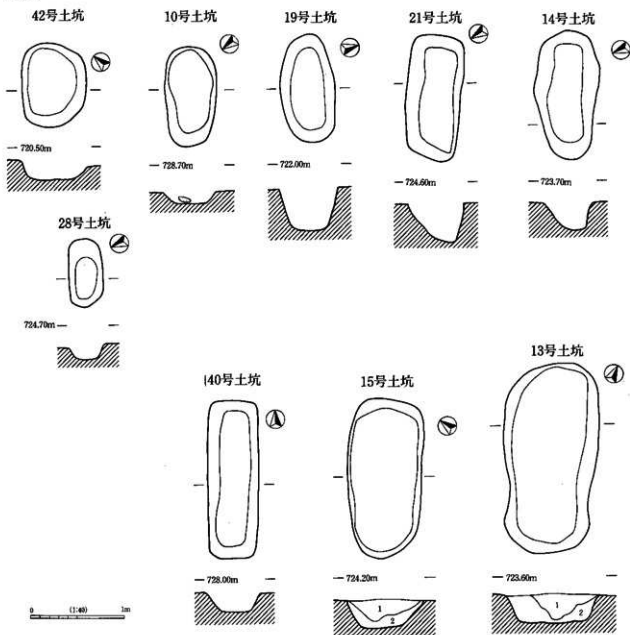


第9図 土坑(1)

B類



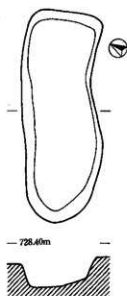
C類



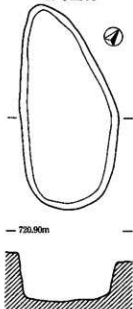
第10图 土坑 (2)

C類

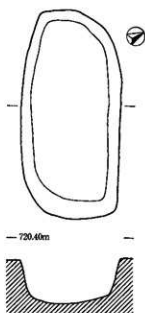
16号土坑



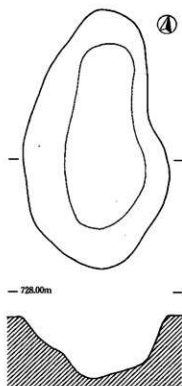
43号土坑



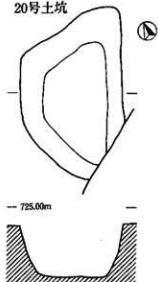
44号土坑



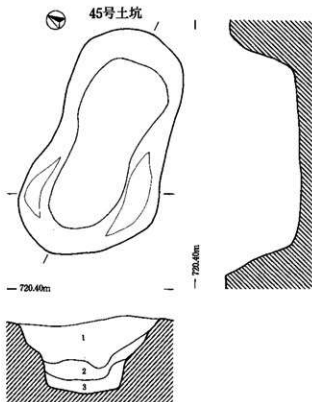
36号土坑



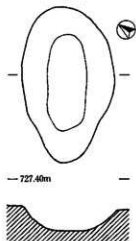
20号土坑



45号土坑

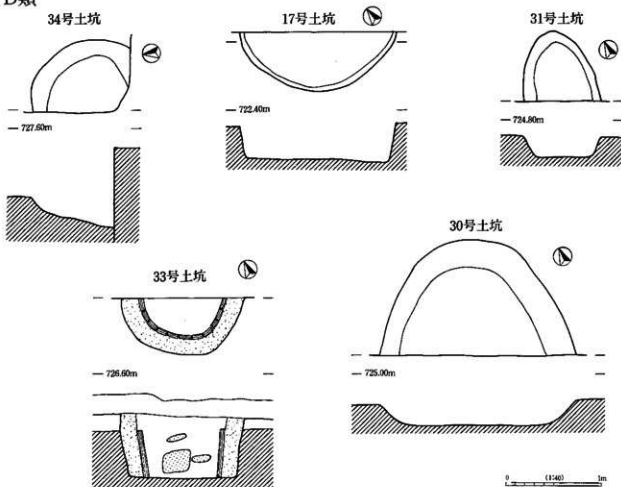


35号土坑



第11圖 土坑 (3)

D類



第12図 土坑(4)

4 遺構外出土の遺物 [第19・20図 PL.5]

縄文時代

図示していないが、中後期に比定できそうな土器片が2点出土している。石器は27点を掲載した。打製石斧(2~12)、剥片(13~16・18・19)、礫片(17・21~25)が出土している。

弥生時代~古墳時代

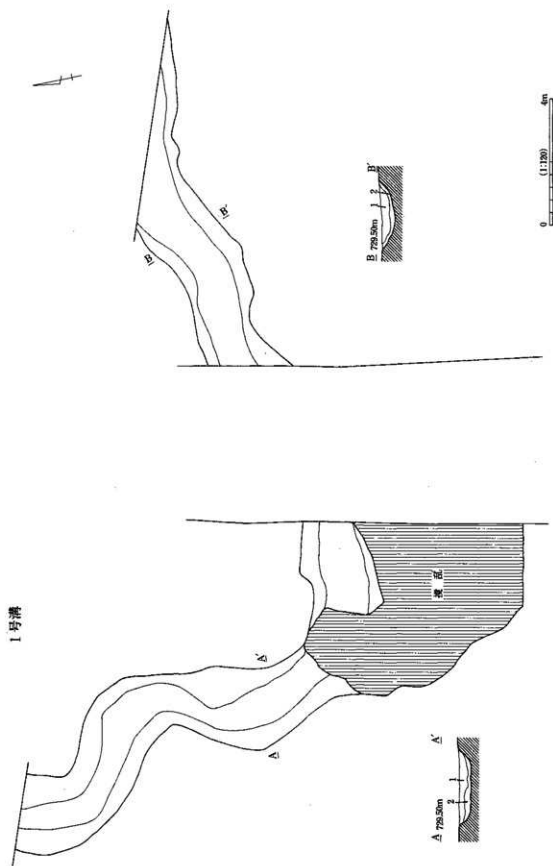
26は石鋏と考えるが、刃器の可能性もある。弥生時代から古墳時代の所産であると判断する。

平安時代

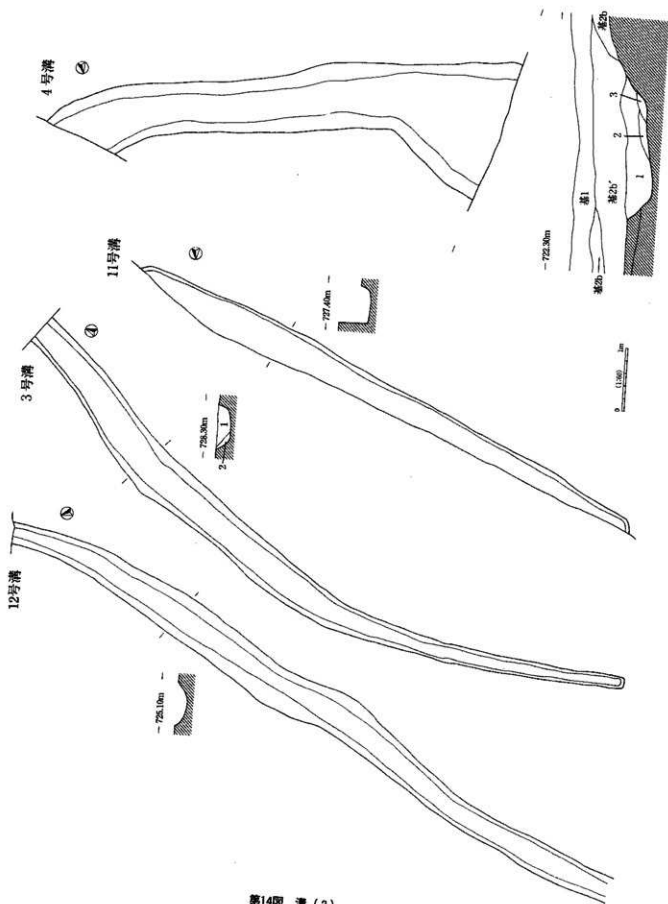
小破片のため図示できなかったが、内面黒色処理の土器片1点(PL.4-7)と灰軸陶器片1点が出土している。

近世以降

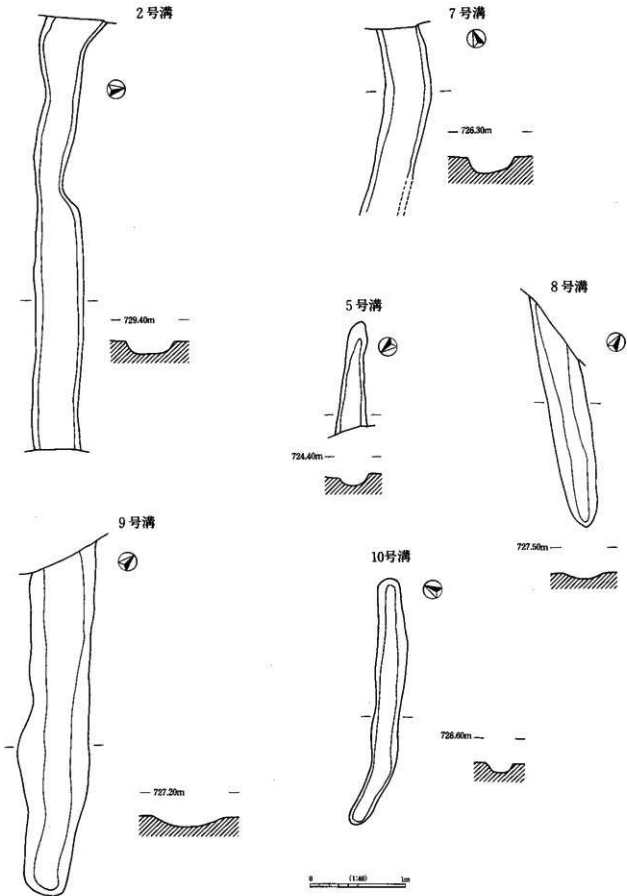
近世陶磁器片が数点出土しているが、小破片のため図示はしていない。瀬戸美濃灰釉碗、伊万里陶器碗などがみられている。27は硯の可能性もあるが、不明石製品としておきたい。時期も不明である。28の石板は近代以降の所産と考えられる。



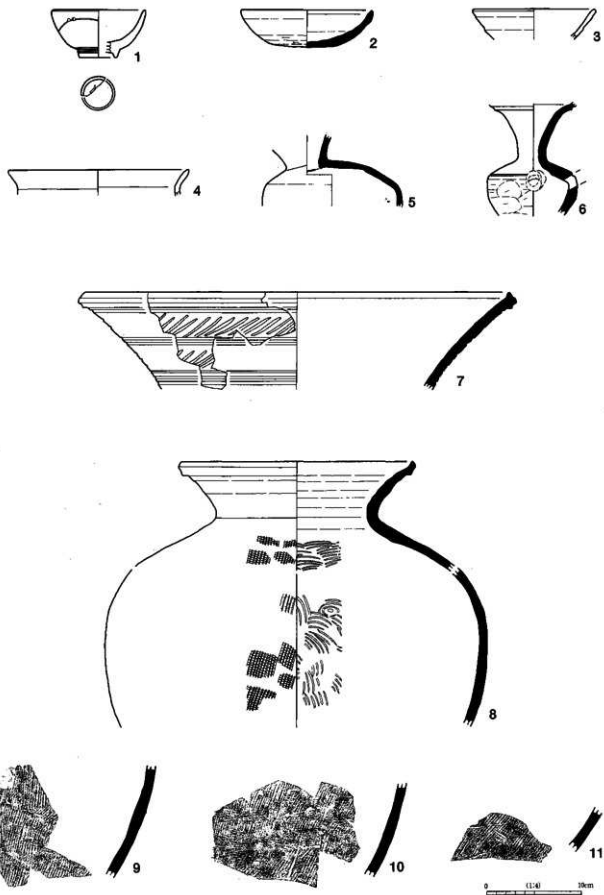
第13図 溝(1)



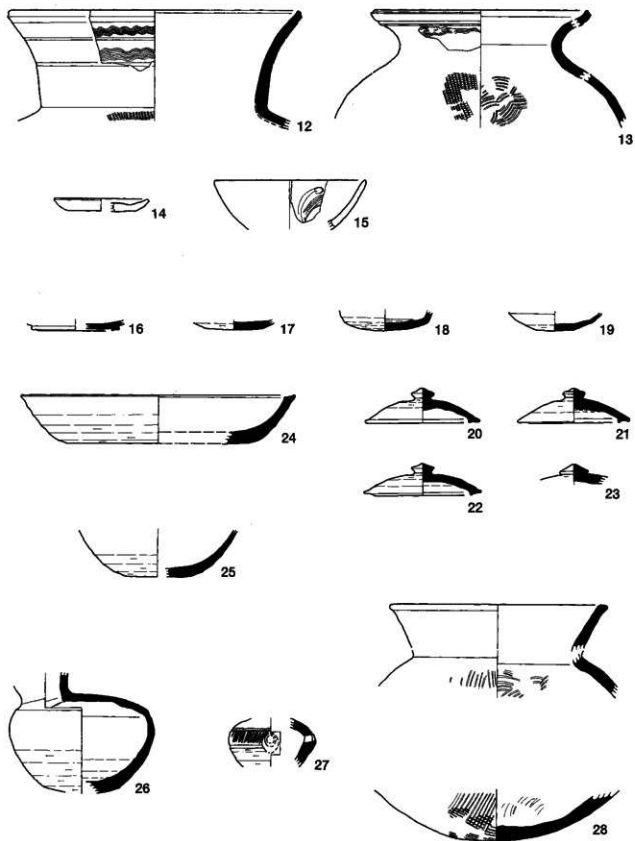
第14圖 溝 (2)



第15図 溝 (3)

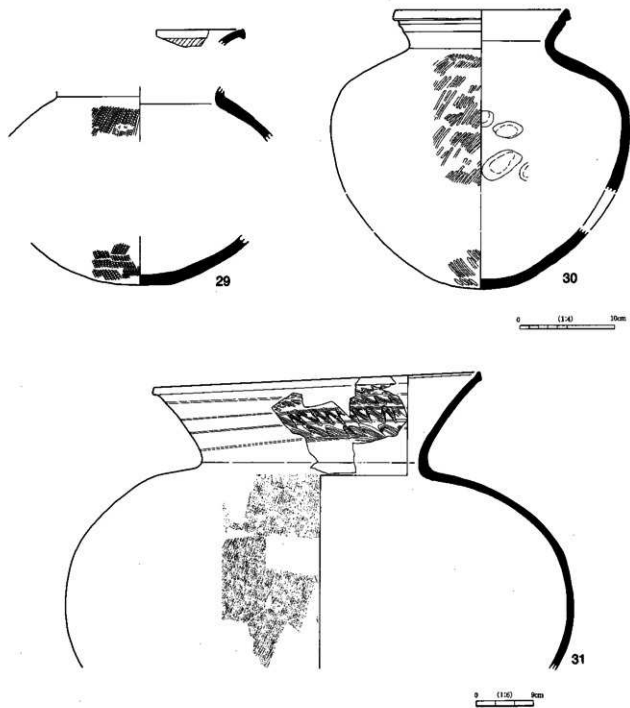


第16図 出土土器(1)

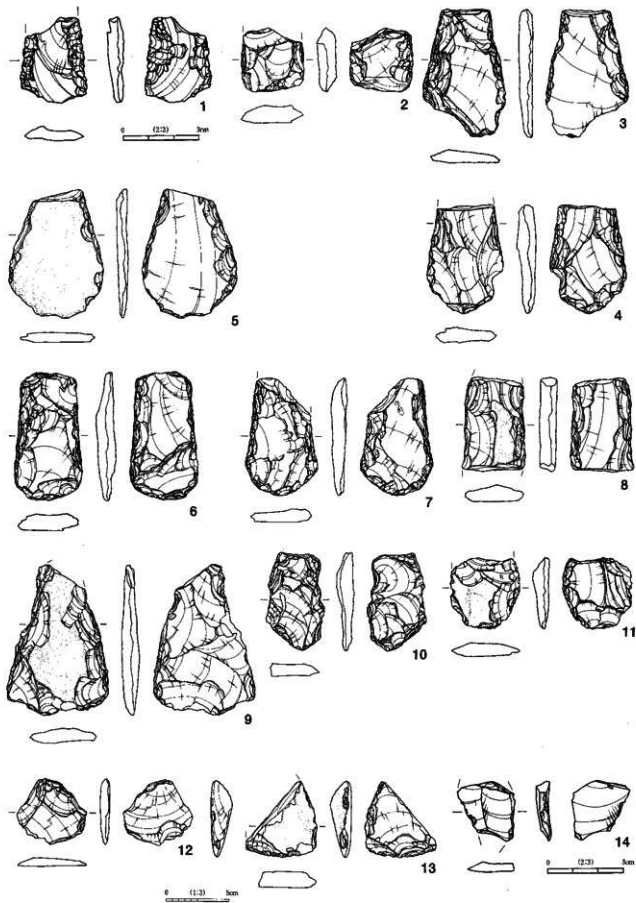


0 10 20 cm

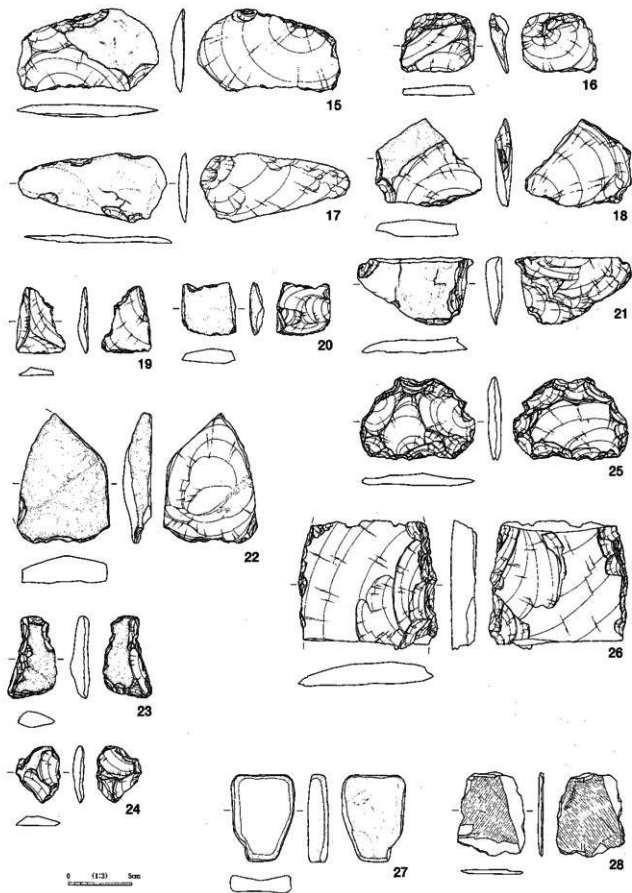
第17図 出土土器(2)



第18図 出土土器 (3)



第19圖 出土石器(1)



第20圖 出土石鏝 (2)

遺構名	記号	図版	地区	グリッド	規模 (cm)	深さ (cm)	分類	覆土	備考
1号土坑	SK01	第9図	④-1	IV-N-23	25×25	18	A	本文に記載あり	
2号土坑	SK02	第9図	④-1	IV-N-24	37×30	23	A	黒褐色(7.5YR2/1)土にローム・砂土含む	
3号土坑	SK03	第9図	④-1	IV-N-23	30×30	15	A	黒褐色(7.5YR2/1)土にローム・砂土含む	
4号土坑	SK04	第9図	④-1	IV-N-23	30×30	15	A	黒褐色(7.5YR2/1)土にローム・砂土含む	
5号土坑	SK05	第9図	④-1	IV-N-24	47×33	30	A	黒褐色(7.5YR2/1)土にローム・砂土含む	
6号土坑	SK06	第9図	④-1	IV-N-24	27×27	12	A	黒褐色(7.5YR2/1)土にローム・砂土含む	
7号土坑	SK07	第9図	④-1	IV-N-24	25×25	13	A	黒褐色(7.5YR2/1)土にローム・砂土含む	
8号土坑	SK08	第9図	④-1	IV-N-23	30×25	15	A	黒褐色(7.5YR2/1)土にローム・砂土含む	
9号土坑	SK09	第9図	④-1	IV-N-24・ IV-S-04	55×50	20	A	褐色(7.5YR3/2)土に小礫含む	
10号土坑	SK10	第10図	①-2	IV-F-25	107×55	11	C	黒色(10YR2/1)土にローム混じる	
11号土坑	SK11	第10図	①-2	IV-L-01	70×60	27	B	本文に記載あり	
12号土坑	SK12	第10図	①-2	IV-F-24	80×80	20	B	黒褐色(10YR3/2)土	
13号土坑	SK13	第10図	①-2	IV-F-18	200×100	31	C	1 黒褐色(10YR3/2)土、 2 暗褐色(10YR3/4)土で 礫含む	
14号土坑	SK14	第10図	①-2	IV-F-19	140×67	30	C	本文に記載あり	
15号土坑	SK15	第10図	①-2	IV-F-24	168×80	30	C	SK14と同じ	
16号土坑	SK16	第11図	①-2	IV-F-17	225×80	32	C	黒褐色(10YR3/2)土	
17号土坑	SK17	第12図	②-5	I-Y-04	(168) ×(62)	40	D	黒色(10YR1.7/1)土	
18号土坑	SK18	第10図	②-5	I-T-21	100×90	25	B	黒色(10YR1.7/1)土	
19号土坑	SK19	第10図	②-5	I-S-19	112×60	45	C	黒色(10YR1.7/1)土	
20号土坑	SK20	第11図	②-3	III-C-18	180×110	58	C	黒褐色(10YR3/1)土でローム含む	
21号土坑	SK21	第10図	②-3	III-C-11	130×58	42	C	暗褐色(10YR3/3)土でローム含む	
22号土坑	SK22	欠番							
23号土坑	SK23	第9図	②-3	III-C-11	25×25	10	A	黒褐色(7.5YR3/1)土でローム含む	
24号土坑	SK24	第9図	②-3	III-C-11	25×25	12	A	黒褐色(7.5YR3/1)土でローム含む	
25号土坑	SK25	第9図	②-3	III-C-12	40×40	10	A	黒褐色(7.5YR3/1)土でローム含む	
26号土坑	SK26	第9図	②-3	III-C-12	40×28	23	A	黒褐色(10YR3/1)土でローム多く含む	
27号土坑	SK27	第9図	②-3	III-C-11	30×30	13	A	黒褐色(10YR3/1)土でローム多く含む	
28号土坑	SK28	第10図	②-3	III-C-17	70×36	17	C	黒褐色(10YR3/1)土でローム多く含む	
29号土坑	SK29	第9図	②-3	III-C-11	20×20	20	A	黒褐色(10YR3/1)土でローム多く含む	
30号土坑	SK30	第12図	②-3	III-C-17・ III-C-22	(210) ×(120)	27	D	本文に記載あり	石器出土
31号土坑	SK31	第12図	②-3	III-C-17	80×72	22	D	黒褐色(10YR3/1)土	

表2 土坑一覧表(1)

第3章 調査結果

遺構名	記号	図版	地区	グリッド	規模 (cm)	深さ (cm)	分類	覆土	備考
32号土坑	SK32	欠番							
33号土坑	SK33	第12図	②-2	Ⅲ-I-04・05	130×130	65	D	本文に記載あり	伊万里碗出土
34号土坑	SK34	第12図	①-2	Ⅲ-J-18・19	不明	33	D	黒色 (10YR1.7/1) 土	
35号土坑	SK35	第11図	①-2	Ⅲ-J-19	162×97	26	C	黒色 (10YR2/1) 土	
36号土坑	SK36	第11図	②-1	Ⅲ-J-12・13	272×152	63	C	黒色 (10YR2/1) 土でローム多く含む	
37号土坑	SK37	第9図	①-2	Ⅲ-J-09	40×30	20	A	黒色 (10YR2/2) 土	
38号土坑	SK38	第9図	②-1	Ⅲ-I-10	32×32	16	A	黒褐色 (10YR2/2) 土	
39号土坑	SK39	第10図	①-2	Ⅳ-F-12	83×78	30	B	黒褐色 (10YR3/2) 土	
40号土坑	SK40	第10図	①-2	Ⅳ-F-12	167×53	27	C	黒褐色 (10YR3/2) 土	
41号土坑	SK41	欠番							
42号土坑	SK42	第10図	③-1	I-S-08	90×70	22	C	黒色 (10YR1.7/1) 土	
43号土坑	SK43	第11図	③-1	I-S-02	220×105	50	C	黒色 (10YR1.7/1) 土	
44号土坑	SK44	第11図	③-1	I-S-08	220×105	50	C	本文に記載あり	
45号土坑	SK45	第11図	③-2	I-M-02	254×120	80	C	本文に記載あり	

表3 土坑一覽表(2)

遺構名	記号	図版	地区	グリッド	規模 (cm)	深さ (cm)	形状	覆土	備考
1号溝	SD01	第13図	①-1・2	Ⅳ-G-22、 Ⅳ-L-02・ 04・07	—	35~ 50	蛇行	本文に記載あり	SD02より新打 井出土
2号溝	SD02	第15図	①-2	Ⅳ-L-02・ 03	(450) × 30~50	13	—	本文に記載あり	SD01より古
3号溝	SD03	第14図	①-2	Ⅳ-F-12・ 17・22	(1100) × 20~75	20	—	1 黒褐色 (10YR2/2) 土 2 1にローム多く混入する	
4号溝	SD04	第14図	②-5	I-S-14・ 15	(700) × 80~230	40	—	本文に記載あり	
5号溝	SD05	第15図	②-3	Ⅲ-B-15	(110) × 35	12	—	黒褐色 (10YR3/1) 土	
6号溝	SD06	欠番					—		
7号溝	SD07	第15図	②-2	Ⅲ-I-05	(200) × 50	20	—	黒褐色 (10YR3/1) 土	
8号溝	SD08	第15図	①-2	Ⅲ-J-09・ 10・15	(250) × 40	6	—	黒褐色 (10YR2/2) 土	
9号溝	SD09	第15図	①-2	Ⅲ-J-14	(350) × 50~75	10	—	黒色 (10YR1.7/1) 土	
10号溝	SD10	第15図	①-2	Ⅳ-F-21・ 22	270×35	10	—	黒褐色 (10YR2/2) 土	
11号溝	SD11	第14図	②-1	Ⅲ-J-07・ 12・13	900×不明	15	—	黒褐色 (10YR3/1) 土	
12号溝	SD12	第14図	②-3	Ⅲ-C-18・ 19・23	(1100) × 35~65	20	—	黒褐色 (10YR3/1) 土	

表4 溝一覽表

図版番号	種類	器種	出土 地点	残存	色調	大きさ (cm)	成形の特徴	備考
第16図-1	磁器	碗	SK33	1/4残	明緑灰色	□10.0 高5.1 底4.0	ロクロ成形、全面施釉、高台ケズリ出し、高台端部輪みきとり、外面草花文	
第16図-2	須恵器	坏	SM01	4/5残	明青灰色	□14.0 高3.9	回転ナデ→底部外面回転ケズリ	
第16図-3	土師器	坏	SM01	□縁部1/6残	にぶい橙 色	□12.8	回転ナデ	
第16図-4	土師器	甕	SM01	□縁部1/3残	にぶい橙 色	□19.0	回転ナデ	
第16図-5	須恵器	平瓶	SM01	□縁部～ 胴部1/5残	灰オリ ブ色	-	回転ナデ 円盤閉塞法	③区-1・2層 と接合
第16図-6	須恵器	甕	SM01	頸部・胴部 4/5残	灰色	-	回転ナデ・胴部以下回転ケズリ→ 手持ちケズリ	
第16図-7	須恵器	甕	SM01	□縁部1/5残	黒褐色	□46.0	回転ナデ→沈線文	
第16図-8	須恵器	甕	SM01	□縁部・胴 部1/3残	灰オリ ブ色	□24.2	胴部格子目タタキ 内面胴部青海波文の当て具痕	
第16図-9	須恵器	甕	SM01	-	灰色	-	外面線刻あり	8と同一個体
第16図-10	須恵器	甕	SM01	-	灰色	-	外面線刻あり	8と同一個体
第16図-11	須恵器	甕	SM01	-	灰色	-	外面線刻あり	8と同一個体
第17図-12	須恵器	甕	SM01	□縁部～ 胴部上半 1/5残	オリ ブ黒色	□31.0	□縁部波状文 胴部格子目タタキ	
第17図-13	須恵器	甕	SM01	□縁部～ 胴部上半 1/4残	灰白色	□23.0	□縁部波状文 胴部格子目タタキ 胴部内面青海波文当て具痕	焼成不良
第17図-14	土師器	坏	SM01	底部1/3残	にぶい黄 橙 色	□10.0 高1.3 底7.2	底部回転糸きり→回転ナデ	
第17図-15	青磁	碗	SM01	□縁部1/8残	緑灰色	□16.0	ロクロ成形、全面施釉、内面に花 文片彫	
第17図-16	須恵器	有台杯	③区- 1・2層	底部1/6残	灰色	底9.0	底部回転ケズリ→高台貼り付けナ デ	
第17図-17	須恵器	坏	③区- 1・2層	底部1/3残	オリ ブ黒色	底6.0	底部回転ケズリ	
第17図-18	須恵器	坏	③区- 1・2層	底部1/2残	オリ ブ黒色	高2.2	回転ナデ→底部回転ケズリ	
第17図-19	須恵器	坏	③区- 1・2層	底部のみ 完形	オリ ブ黒色	底4.0	回転ナデ→底部回転ケズリ	
第17図-20	須恵器	坏蓋	③区- 1・2層	1/5残	灰色	□12.2 高3.7	天井部回転ケズリ つまみ貼り付け	
第17図-21	須恵器	坏蓋	③区- 1・2層	1/6残	灰色	□11.8 高3.6	天井部回転ケズリ つまみ貼り付け	
第17図-22	須恵器	坏蓋	③区- 1・2層	1/8残	灰色	□12.4 高3.4	天井部回転ケズリ つまみ貼り付け	
第17図-23	須恵器	坏蓋	③区- 1・2層	つまみ部 のみ	灰黄色	-	天井部回転ケズリ つまみ貼り付け	
第17図-24	須恵器	甕	③区- 1・2層	底部1/5残	灰黄色	□29.0 高5.1 底19.6	回転ナデ→底部回転ケズリ	焼成不良
第17図-25	須恵器	甕	③区- 1・2層	底部1/5残	淡黄色	底7.4	回転ナデ→底部回転ケズリ	焼成不良
第17図-26	須恵器	平瓶	③区- 1・2層	□縁部～ 胴部1/2残	灰色	-	回転ナデ胴部中半以下回転ケズリ 円盤閉塞法 空気抜け小穴あり	胴部上半自然 輪あり
第17図-27	須恵器	甕	2層	胴部1/5残	灰白色	-	回転ナデ→胴部下半回転ケズリ	胴部自然輪
第17図-28	須恵器	甕	③区- 1・2層	□～底 部1/5残	にぶい黄 橙 色	□23.0	回転ナデ→胴部以下格子目タタキ 内面胴部青海波文の当て具痕	焼成不良
第18図-29	須恵器	甕	③区- 1・2層	□縁部～ 底部1/5残	にぶい黄 橙 色	-	胴部格子目タタキ	焼成不良
第18図-30	須恵器	甕	③区- 1・2層	□縁部～ 底部1/6残	灰黄色	□18.6	□縁部回転ナデ 胴部平行タタキ 胴部内面青海波文の当て具痕	
第18図-31	須恵器	甕	③区- 1・2層	□縁部～ 胴部1/3残	灰オリ ブ	□52.0	□縁部沈線文→波状文 胴部平行タタキ	

表5 土器観察表

第3章 調査結果

図版	器種	石材	出土地点	形態	残存状態	刃部形態	刃部角	刃部幅	長(ミ)	幅(ミ)	厚(ミ)	重量(グラム)	備考
第19図-1	削器	黒曜石	SK30	-	部分欠	直刃	25	33.8	34.6	26.5	6.9	4.7	ハートハンマーの磨 圧剥離で刃部形成
第19図-2	打製石斧	無斑晶質 安山岩	SD01	不明	断片	不明	不明	不明	51.2	49.4	15.7	49	
第19図-3	打製石斧	無斑晶質 安山岩	SD01	バチ形	刃部・基 部欠損	不明	不明	不明	101.8	65.4	11.3	80.7	
第19図-4	打製石斧	無斑晶質 安山岩	①区- 2層	短冊形	基部欠損	円刃	30	58.5	86.6	60.3	15.4	77.9	全表面に磨 耗痕
第19図-5	打製石斧	無斑晶質 安山岩	③区- 2層	バチ形	基部欠損	円刃	20	73.3	102.2	74.6	9.2	71	刃部磨耗
第19図-6	打製石斧	無斑晶質 安山岩	SD01	短冊形	完形	円刃	30	51.9	101.9	54	16.1	96.5	
第19図-7	打製石斧	無斑晶質 安山岩	③区- 2層	バチ形	基部欠損	円刃	30	55.9	93.5	57.2	13.1	66	
第19図-8	打製石斧	無斑晶質 安山岩	③区- 2層	不明	断片	不明	不明	不明	74.9	50	14.1	71.9	
第19図-9	打製石斧	無斑晶質 安山岩	③区- 2層	バチ形	基部欠損	直刃	30	79.8	119.6	80.6	13.9	138.6	
第19図-10	打製石斧	安山岩	③区- 2層	不明	断片	不明	不明	不明	78.2	46.4	14.1	45.8	
第19図-11	打製石斧	無斑晶質 安山岩	①区- 2層	不明	刃部断片	円刃	20	51.6	56.2	54.3	13.5	37.1	
第19図-12	剥片	無斑晶質 安山岩	SD01	-	-	-	-	-	52.3	55.2	8.3	21.4	打製石斧製 作剥片か?
第19図-13	打製石斧	無斑晶質 安山岩	不明	不明	断片	-	-	-	60.6	56	16.8	51.3	
第19図-14	剥片	黒曜石	①区- 2層	縦長剥片	打面と末 端欠	-	-	-	24	23.1	5.9	2.8	
第20図-15	剥片	無斑晶質 安山岩	①区- 2層	-	-	-	-	-	65.5	112.9	10.5	77.1	
第20図-16	剥片	無斑晶質 安山岩	③区- 2層	横長剥片	完形	-	-	-	47.8	59.8	15.7	37.8	
第20図-17	礫片	無斑晶質 安山岩	③区- 2層	-	-	-	-	-	54.6	118.1	7.1	41.2	
第20図-18	剥片	無斑晶質 安山岩	不明	-	-	-	-	-	69.7	83.9	13.8	78	
第20図-19	剥片	無斑晶質 安山岩	③区	-	-	-	-	-	52.9	39.4	7.8	14.2	
第20図-20	礫片	無斑晶質 安山岩	③区- 2層	-	-	-	-	-	42.5	42.5	12.2	24.5	
第20図-21	礫片	無斑晶質 安山岩	③区- 1・2層	-	-	-	-	-	53.9	91.8	13.3	59.5	
第20図-22	礫片	無斑晶質 安山岩	③区- 1・2層	-	-	-	-	-	103.3	74.3	23.4	175.1	
第20図-23	礫片	無斑晶質 安山岩	不明	-	-	-	-	-	65.5	39	14.7	31.1	
第20図-24	礫片	無斑晶質 安山岩	不明	-	-	-	-	-	45.2	35.2	8.5	12.9	
第20図-25	礫片	無斑晶質 安山岩	不明	-	-	-	-	-	65.9	90.5	10.9	71.9	
第20図-26	石敷	無斑晶質 安山岩	③区- 1・2層	不明	断片	不明	不明	不明	102.7	110.2	20.5	326	弥生時代以 降か。刃部の 可能性もあり
第20図-27	石製品	無斑晶質 安山岩	不明	-	-	-	-	-	69.1	50.6	14.8	70.8	視か?不明 石製品
第20図-28	石板	無斑晶質 安山岩	③区- 2層	-	-	-	-	-	67	53.7	3.8	21.9	近代以降

表6 石器観察表

第4章 まとめ

今回の発掘調査では、遺構としては古墳周溝、土坑、溝が検出され、遺物では縄文時代中後期土器・石器、弥生時代石器、古墳時代土器、平安時代土器、中近世陶磁器が出土した。土坑は縄文時代石器および近世磁器を出土した2基を除いて時期は不明であり、溝も縄文時代石器を伴う1本を除いて遺物の出土はみなかった。その出土遺物も決して多くはない。いずれの時代にも住居跡が全く検出されなかったため、集落域であったとは考えられない。詳細分布調査では縄文時代中期土器・石器、平安時代の土器等が採集されているが、遺跡の中心は今回の調査範囲である沖積地よりも南側の山麓台地寄りにあるものと考えられる(白田町教委1989a)。

一方、周溝のみの検出ではあったが、7世紀後半に位置づけられる古墳を発見することができた。現況は畑地であり、まったくの平坦部であった。主体部はすでに失われており、わずかに周溝のみが残存していたものであった。地元の年配者の方数人に話をお聞きしたところでは、この地に古墳が存在したとの伝承等はなかったようであるが、本古墳の所在する地点の小字名は「塚畑」であり、地名は古墳の存在を示していたことになる。地名の重要性を強く認識した次第である。

雨川北岸では6世紀後半から8世紀代の12基の円墳からなる幸神古墳群、6世紀後半～7世紀前半の7基の円墳からなる新海三社神社周辺の古墳群など計27基の古墳がみられるのに対し、雨川南岸の三分地籍では初の古墳の発見ということになる。単独の古墳であるのか、あるいは古墳群をなすのかは現段階では不明だが、町内での古墳分布のありかたをみると、単独古墳は少なく、古墳群を成すものが多い。したがって今後周辺でさらに新しい古墳の発見される可能性も十分考えられる。そこで今回の新発見古墳は、三分第1号古墳と呼称することにした。

三分第1号古墳は周溝のみが残った煙滅古墳である。周溝からは20～30cm程の大きさを主体とする礫が多量に認められ、それに混じって土器も多く出土した。この礫は外護列石が崩落して周溝に落ち込んだものと理解できる。また土器は、墳丘に並べられたものが転落したと考えられる。土器は須恵器が圧倒的に多い。なかでも甕類の割合が高く、また甕や平瓶などの供献用のものも認められる。こうした土器組成のありかたからみても、墳丘上に置かれたものであることが理解できる。周溝は調査範囲内では3分の2程度がめぐっており、内法16m前後、外法で20m前後の規模をはかると考えられる。

三分地籍での遺跡の発掘調査例は本遺跡と井上遺跡をあげるにすぎないが、詳細分布調査の成果によれば弥生時代後期の遺跡が町内でも集中する地域である。井上遺跡ではごく一部の範囲での調査ではあったが、古墳時代中期から後期の住居跡4軒などが検出されている(白田町教委1980)。三分地籍が古墳の築造を可能にした社会基盤を有していたことがうかがえ、今後発掘調査が進めば、古墳時代の遺跡の発見が増えるものと考えられる。

今回の三分第1号古墳の発見で、南佐久郡内の古墳は51基を数えることとなった。そのうち白田町内に49基がみられ、千曲川左岸では佐久町塚畑古墳、同右岸では佐久町原古墳が南限であり、それより以南の八千穂村、小海町、北相木村、南相木村、川上村、南牧村には古墳は存在しない。

また千曲川左岸に古墳は偏在しており、同右岸では白田町内で3基、佐久町内で1基しか認められていない。この現象は佐久市域でも同様なありかたを示している。これについては千曲川右岸の佐久山地区では古墳石室に使用する石材の産出が豊富であるからとの見解が強いが、それだけでは説明しきれないことはたしかである(井出1998)。

千曲川右岸でも、雨川流域の田口地区と谷川流域の青沼地区入沢地籍に古墳は集中している。雨川沿い

には田口峠を経て群馬県甘楽郡へ抜ける田口峠道（砥沢通り）が通っており、その流域沿いには縄文時代から平安時代にかけての遺跡が続いている。幸神古墳群・割塚古墳・明法寺古墳・新海三社神社周辺の古墳7基と田口地区の雨川北岸の古墳もこの田口峠道に沿って分布していることが理解できるのである。こうした雨川北岸の古墳については、従来より田口峠を経由した上野国甘楽郡とのつながりが指摘されているが（井出1998 註1）、まさに交通の要所であることが6世紀後半から8世紀初頭に至るまで多数の古墳の築造が続けられた大きな要因のひとつといえるだろう。そして雨川北岸下流域の原地籍・大奈良地籍では肥沃な沖積地がひろがり、これが古墳築造を可能にした生産力の源であったと考えられる。原遺跡は町内最大の面積を有する遺跡であり、縄文時代から中世に至る遺跡である。昭和63年にはその一部の発掘調査が行われ、古墳時代末～奈良時代の住居跡が検出されている（白田町教委1989b）。

対する雨川南岸では、今回発見された三分第1号古墳が現在のところ唯一の古墳である。北岸と対照的な古墳分布であるが、井上遺跡をはじめ弥生時代から古墳時代の遺跡は南岸にも多く認められており、生産力において遜色はないといえる。したがってやはり、田口峠道の対岸であることに古墳数の差異の原因を求めべきだと考えるものである。

三分地籍は近世には三分村であった。「三分（みぶん）」という地名については、一般には、江戸時代の慶長年間に残された仙石氏高帳の記載から、当時この村が「上小井」、「平賀」、「高橋」の三つの組に分かれていたことに由来するといわれているが（長野県1936・横山2002）、もうひとつ興味深い説がある。それは「三分」とは本来は「屯倉（みやけ）」であり、それが転訛して「みわけ（三分）」となって、「みぶん」と音読みされたというものである。これは一志茂樹氏が唱えた説であり（註2）、論の要旨は以下のとおりである（沖浦1985・井出1998）。つまり、三分地籍の周辺には田口地区と接する佐久市域に「太田部（おおたべ）地籍」が存在しているが、「太田部」とは屯倉の耕作民をあらわす「田部」に大という美称をつけたものであり、屯倉との関連が指摘できる。また同じ田口地区には「大奈良（おおなら）地籍」がみられ、その鎮守神は原地籍にある田春日神社（現在の御幸神社）である。このように「三分」が「みやけ」の転訛と考えられること、奈良に関係する地名や神社がこの近隣に認められることは「屯倉」とのつながりを示すものではないかというのである。

和語として考えた場合でも「三分」を「みぶん」と読むことは、和語としては通じないことはたしかである（註3）。この点からも前述したような「みやけ」から「みぶん」に転訛した可能性は十分に高いと考えられるが、ここではその可能性を指摘するにとどめ、今後の研究の進展に期待したい。

このような注目すべき歴史的環境にある三分地籍から初めて古墳が発見されたことは、地域の歴史を解明する上からも重要な資料になるものと期待される。本書が今後多方面にわたって活用されることを願い、結びとしたい。

註

- 1 甘楽郡には渡来人が早くから居住し、古墳も多く認められている。また「観山大師伝」において最澄が上野国浄土院（現在の鬼石町浄法寺）に法華経1000部を運ったルートとしては、一志氏により茅野市芹ヶ沢の大山寺⇒大河原峠⇒新海三社神社⇒田口峠⇒貫前神社⇒浄法寺の道程が推定されている（井出1998）。また上野国には物部氏の存在も多くみられ、富岡市に所在する貫前神社は物部姓の磯部氏が経津主神を祀ったことにはじまるといわれ、上野国一之宮である。一方、田口地区の清川地籍からは9世紀以降に比定される「物部楢丸」の銅製私印が江戸時代に出土しているが、これも上野国とのつながりの深さをあらわすものひとつであると考えられる。
- 2 ただし、長野県教育委員会福島正樹氏のご教示によると、論文等で発表されたことはないようである。なお東御市（旧東部町田中地区）には「三分（みわけ）川」という川と「三分（みわけ）」という小字名が2カ所のみでみられており、一志氏はこれについても「屯倉」との関連性を指摘している（東部町誌編纂委員会1990）。
- 3 福島正樹氏のご教示による。

引用参考文献

井出正義1996「第六章 古墳時代」『南佐久郡誌 考古編』南佐久郡誌刊行会

白田町教育委員会1980『井上遺跡』

白田町教育委員会1989a『白田町遺跡詳細分布調査報告書』

白田町教育委員会1989b『原遺跡』

沖浦悦夫1985「第6章 興波政命後裔の統治する国の内部の変化」『南佐久郡誌 古代・中世編』南佐久郡誌刊行会

黒板周平・古川貞雄編1991『信州の街道』郷土出版社

東部町誌編纂委員会1990『東部町誌 歴史編上』

長野縣1936『長野縣町村誌《東信編》』（今回は郷土出版社から1985年に復刻されたものによった。）

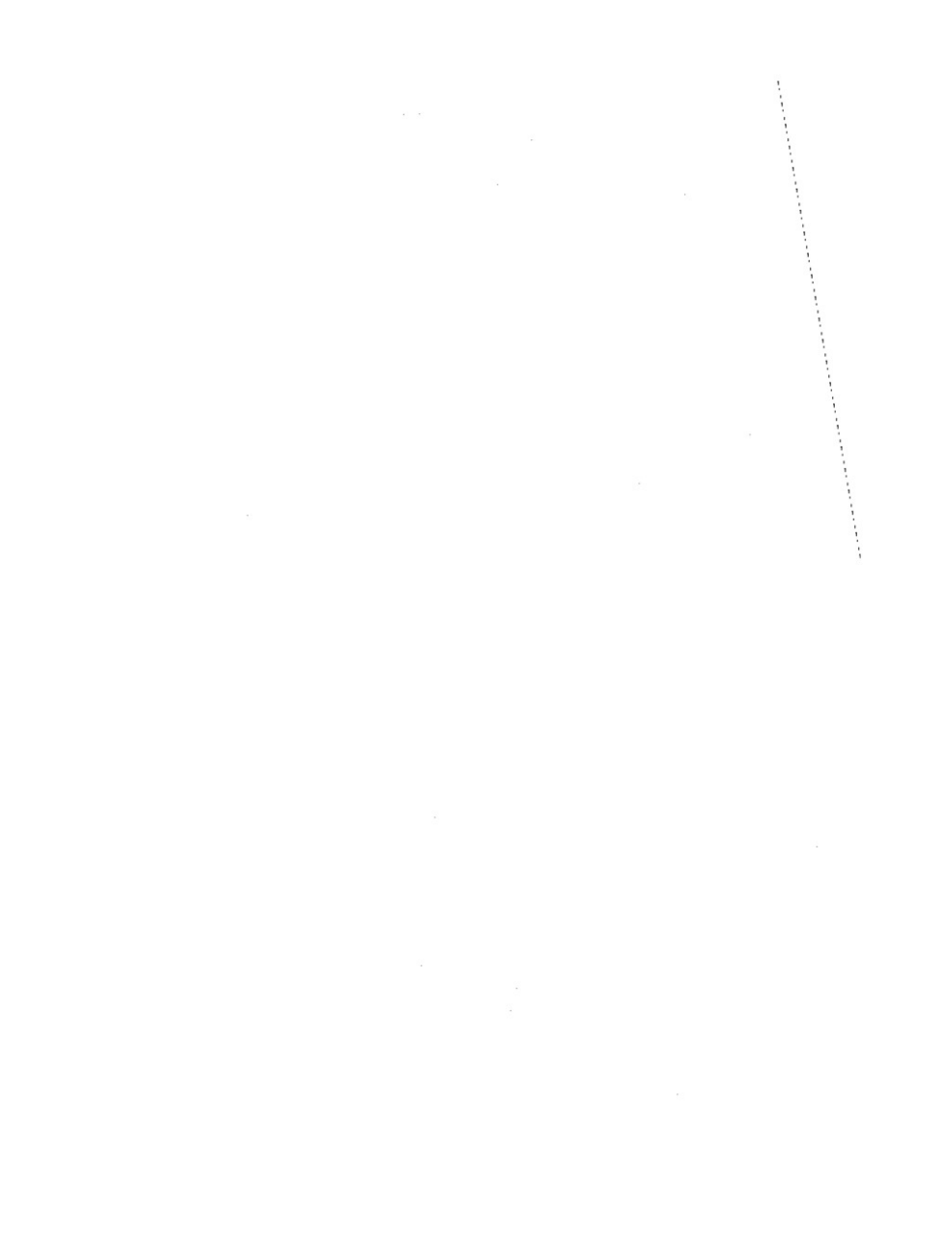
横山順一2002「第3章 近世の村 第7節 村々の歴史 三分村」『南佐久郡誌 近世編』南佐久郡誌刊行会



調査前の風景 平成15年3月



工事終了後の風景 平成16年12月



写真図版



遺跡遠景
(①②区を
西からのぞむ)



左：②区遠景
(南から)



右：③区遠景
(西から)



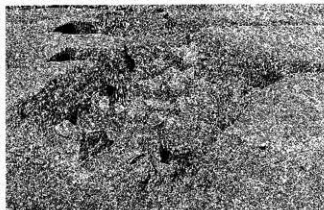
左：三分第1号古墳
(西から)



右：古墳周溝
(北から)

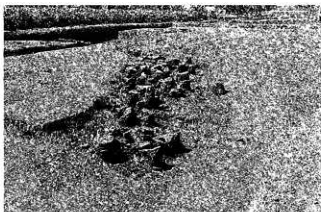


左：古墳周溝
(西から)



右：古墳周溝
(南から)

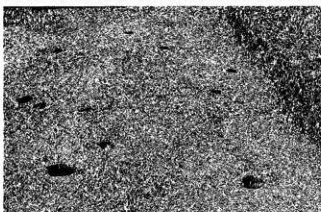
左：古墳周溝
(東から)



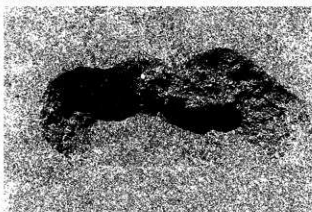
右：古墳周溝
完掘 (西から)



左：④区土坑群
(東から)



右：45号土坑
(西から)



左：33号土坑
(南から)



右：33号土坑
(西から)

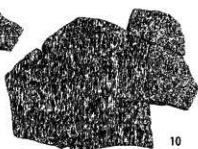
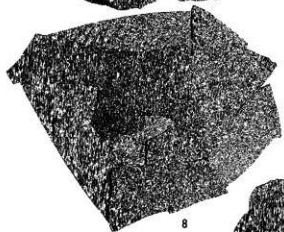
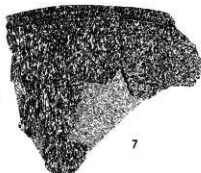


左：1号溝
(上が北)



右：1号溝
(北から)



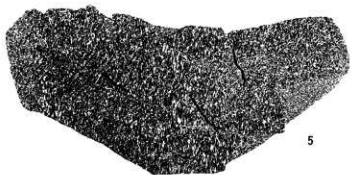
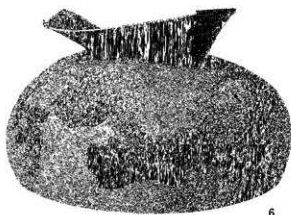
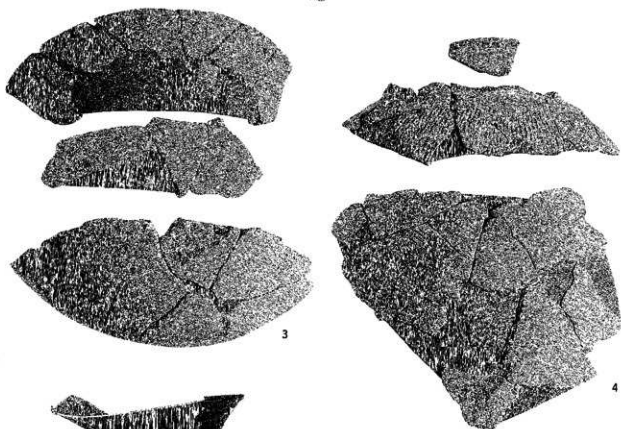
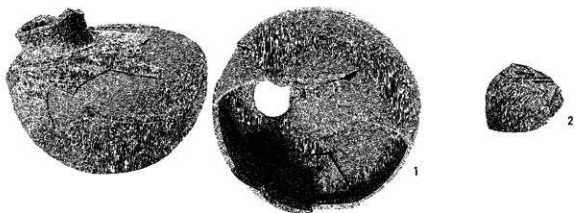


20

21

22

- 1 第17図-26
- 2 " -27
- 3 " -28
- 4 第18図-29
- 5 " -30
- 6 " -31
- 7 平安時代土器
(未図示)





1



14



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書73
地方道路交付金業務
(主) 下仁田白田線埋蔵文化財発掘調査報告書
—白田町内—

三分遺跡

発行 平成17年(2005年)3月4日
発行者 長野県白田建設事務所
(財)長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田963-4
Tel 026-293-5926 Fax 026-293-8157
Email maibun@grn.janis.or.jp

印刷 第一印刷株式会社
〒380-0838 長野市県町528